

韓国立正校成会における

在日コリアン二世の女性教会長の生活史

渡辺雅子

はじめに

韓国立正校成会（以下、立正校成会を校成会と略記）の三代目の教会長で、初めての韓国人教会長であった李福順さんが二〇一五年二月七日に亡くなった。三月二七日にソウルにある韓国校成会の教会道場で四十九日の法要が営まれ、筆者も参列し、墓参りもさせていただいた。福順さんとは二〇〇四年二月に初めて韓国校成会に調査に訪れた時に出会った。その時にはご自宅マンションに泊めていただき、いろいろとお話を伺うことができた。また、料理が好きで上手な福順さんのおいしいお料理に舌鼓を打った。

韓国校成会には、二〇〇四年二月と九月、二〇〇七年八月、二〇〇九年一月、二〇一四年二月、二〇一五年三月に訪問して調査を行った。このほか、韓国校成会関係者が訪日の折に日本で、メールで、電話などで聞き取り調査を重ねている。これまで、韓国校成会に関して、三つの論文を執筆した。「韓国における立正校成会の展開過程——日本宗教であることの困難と在日韓国人による現地韓国人布教」（二〇〇五）、「韓国立正校成会にみる

日本的要素の持続と変容——現地化への取り組み」(二〇一〇)、「韓国立正佼成会の支部組織の転機と韓国人支部長の信仰受容の諸相——教会の増改築が与えた影響に着目して」(二〇一五)である。これらの内容は韓国佼成会の展開過程、現地化の諸相、韓国人幹部信者の信仰受容の諸相などについてであって、韓国佼成会に貢献した福順さんの生活史にはほとんど触れていなかった。二〇一五年二月、福順さんの計報に接し、その生活史を残しておく必要があるのではないかと痛切に思った。福順さんの生活史についてまとまって聞き取りを行ったのは二〇〇四年二月と九月が主だが、二〇〇七年にも一部聞き取りを行っている。また、信者からの聞き取りの中にも福順さんの指導や人柄などがでてきてはいた。今回、論文としてまとめるにあたって、福順さんからの聞き取りに加えて、補足の情報として、長女で、韓国佼成会を二人三脚で担ってきた李幸子さん(現、教会長)、長男で、日本の佼成会本部職員の李史好さんからの聞き取りも参考にした。

福順さんは、東京都中央区月島で在日コリアン(韓国人)二世として生まれ、神奈川県川崎市で幼少時を過ごし、三歳の時に大阪府堺市に転居、結婚後は大阪市生野区(在日コリアンが多く居住)に住んで洋服縫製の家内工業を営み、その後、一九六八年に家族で韓国へ引き揚げたものの、韓国に適応できず、なんとか家族を日本に戻したいという思いで、日韓を往復し、最終的には韓国に着地した。

福順さんの人生を考えるにあたって、日本の新宗教の一つである佼成会(註)の信仰の果たしている役割は大きい。福順さんは、日韓を行ったり来たりしている間に(当時は日本滞在のほうが主)、一九七三年に大阪で佼成会に入会した。入会の理由は、家族を日本に戻したいということがきっかけだった。その後、佼成会の活動を活発に行い、日本では一九七八年に組長(教会長—支部長—主任—組長—班長というライン)になった。

韓国倭成会は一九七九年にソウルに拠点がおかれ、日本人の教会長が日韓を往復するかたちで維持していたが、ビザの問題、反日感情の問題などで、日本人を教会長として派遣することが難しくなった時に、主に日本に居住して、日韓を往復していた福順さんに白羽の矢が立った。長女の李幸子さんは初期から韓国倭成会にかかわっていた。

福順さんの生活史は、在日コリアン二世として生まれ、心の中は日本人アイデンティティをもっている人が、家族で韓国に引き揚げ、しかし、家族の中で一人だけ永住権を保持して、日韓を行ったり来たりし、さまざまな逡巡の後、韓国で永住していく過程、そして、韓国で主任、支部長、教会長と昇格していき、信仰者としての自己形成をし、韓国倭成会を担っていた一人の女性の軌跡である。そのさまざまな人生経験は、韓国でも多くの信者を育成した。

それでは、次に福順さんの人生の軌跡を追っていこう。なお、以下からは人名は敬称略とする。

一 生い立ちと結婚

父母のこと

李福順は、一九三六年八月二六日に、女五人、男一人の六人きょうだいの二番目、次女として生まれた。父の名前は李斗源（一九〇一―二〇〇三）、母の名前は金午令^{（註）}（一九〇六―一九八六）である。父母は済州島出身で、日本の植民地時代の一九三〇年代に来日し、日本で結婚した。李一家は、日本では李ではなく古岡という通名を

韓国立正佼成会における在日コリアン二世の女性教会長の生活史



写真1 福順の父母

使っており、李福順は古岡福子という通名を使用した。福順は「日本名を使った。李と戸籍名には書いてあったかもしれないが、父はあくまでも古岡で通した」と述べている。父は親戚が経営していた鉄工所の工員をしていたが、その収入だけでは生活が苦しいので、母が女性服を仕入れ、家々を回る行商をしていた。なお、一家は韓国・朝鮮人の居住する地域には住まず、少し離れた日本人の居住地域に住んでいたという。福順は父について、「尊敬している。父は人にほどこしをする人だった。父はまっすぐな人で、苦しくてもくださいという言葉を言えない人だった。父の性格を尊敬している。紳士だった」と語っている⁽³⁾。

学歴・幼稚園の先生になる

堺市の小学校を卒業後、大阪市の建国中学校⁽⁴⁾に進学し、同校を一九五一年に卒業した。その後、堺市

の定時制高校に進学、一九五五年に卒業した。定時制高校在学中の一九五三年四月から一九五六年二月まで、堺市の花園幼稚園に幼稚園の「先生」として勤務した⁽⁵⁾。

花園幼稚園では、園長先生に気に入られ、養女になってほしいと言われた。幼稚園の園長先生は、福順の人生にとって影響を与えた人物である。福順は、園長先生の立ち居振る舞い、礼儀作法などの仕込みがなかったならば、今の自分はなかったとも思っている。また、養女に望まれたのに、そうしなかったことが人生の岐路であったとも認識している。幼稚園の園長先生との関係について福順は次のように語っている。

「堺市の幼稚園に三年間勤めた。園長先生には子どもがいなかったので、私を養女にしたいと思って、散々仕込んだ。玄関に入ったらただいまと言って、脱いだ靴をそろえる。畳のふちをふまずに、すり足で歩かないと怒られた。座布団の座り方も教えてもらった。その頃、百貨店に行ったことがなかったが、大丸に園長先生の甥が勤めていて、そこに連れていってもらい、食堂で食べたことがないものを食べさせてもらい、オーバーを買ってもらった。

二〇歳の時（一九五六年）、幼稚園の夏休みの一カ月間、園長先生のお姉さんの家（デパートに勤めていた甥の家）にお手伝いにいかされた。ベントの乗用車がある金持ちの家だった。これはそのうちのお手伝いとしてというより、自分の娘にしたいので、お手伝いにいかせて仕込んだ。顔を洗ったらすぐトイレの掃除をした。下着は裏返して洗う、靴下は最後に洗うということを学んだ。お手伝いにいってはじめてトンカツ、コロッケを食べた。あの時代、家でトンカツやコロッケをあげるというのはなかった。食べ物に豊富だった。トンカツソースとか私は食べたことがなかった。まるで夢の世界だった。



写真2 花園幼稚園と園長先生



写真3 花園幼稚園の園児たちとの記念写真
左端が福順



写真4 福順の姉の経営する洋品店

園長先生はお金のこととみんな私に任せた。銀行にも行った。園長先生からかつおぶしを削って、醬油をかけて食べるのもおそわった。お茶の淹れ方、飲み方を教えてくれ、そして湯飲みをもてないほど熱いお茶を出してはいけないなど、しつけてくれた。私のことを、『私の子ども』と言っていたし、後継ぎにしたいと他の先生にも言っていた。私の家は六人きょうだいで、女が五人もいた。幼稚園の先生をやっていて、園長先生が私を見んだ。園長先生が私を養女にもらいたいと親元に三回来た。父は賛成したが母は養女にはやれないと断った。あれが人生の分かれ目だった。お母さんはバタバタやっていてしつけることはできなかった。

養女の話を通ったあと、幼稚園を辞めた。結婚した姉が洋品店（女性の衣料や毛糸の販売店）を経営していたが、幼稚園は給料が安いから、自分のところに来たら、お給料を倍あげるとうちのお母さんをくどいた。そこでは店番や品物の仕入れを担当した。園長さんは堺から洋品店のある玉造（大阪市天王寺区鶴橋から一キロ）まで来て、もう一回戻ってくれないかと言った。園長先生は今でも恩師。日本の儀礼儀式はそこでおそわった。畳をふまず、座布団に座る時は感謝の気持で。頭の下げ方も教えてくれた。日本の礼儀作法を学んだ。だからこうできたのかと思う。すごい先生だった。

園長先生から学んだ日本式の礼儀作法は、後に福順が日本人の中で佼成会の活動をしていくのに力になった。

結婚

一九五六年一二月に、福順は幼稚園を辞めて、姉のやっている洋品店に勤めることになった。この洋品店に品物を卸しに運んできていたのが、のちに夫になる李奉雨（一九三七年五月一日生）である。福順が洋品の仕入れに問屋に行った時に、奉雨と問屋でも会うことが重なった。奉雨は日本では石原弘道という通名をつかっていた。在日コリアン二世である。奉雨の父母は、植民地時代に日本に来て、奉雨は大阪で生まれた。父母は日韓を行ったり来たりしていたが、奉雨が五歳の時に父が死去した。奉雨は一人っ子だった。父の死後、全羅北道の田舎で祖父母の面倒をみるため、母とともに帰国し、奉雨は小学校と中学校は韓国の学校に通った。奉雨は中学を卒業後、一九五三年に来日した。奉雨の亡くなった父には三人の姉（伯母）がいるが、一人は済州島に、二人は日本に在住し、母方のきょうだいもみな日本にいた。当時は韓国から日本に働きに行きたいという人が多く、日本に行けるのは幸運だと思われていた。日本に来てからは大阪市にある居留民団の高校（建国高等学校）に通った。卒業後、大阪市生野区鶴橋にある洋服や雑貨の問屋を経営していた伯母の店で、配達や仕入れの手伝いをした。その店は鶴橋でも有名な大きな問屋だった。（鶴橋は現在コリアタウンといわれる在日コリアンが多い地域である。）奉雨は早くに父を亡くしたこともあり、親戚が親切にしてくれた。奉雨は無口で、おとなしく、ハンサムで、俳優の石原裕次郎に似ていると言われていた。

福順自身は、奉雨が日本に親戚がいるとはいえ母親が韓国にいて一人ぼっちだったので、いい人なのかかわいそうだという「同情結婚」だというが、幸子が福順の妹（三女）である叔母に聞いたところ、「熱い恋愛」だったという。福順の父母は、福順と奉雨の姓が同じ李で、本貫（祖先の発祥の地）も同じ古阜なので、同姓同本不



写真5 福順と奉雨の結婚写真
アベノ近鉄写真室で撮影



写真6 結婚式の集合写真



写真7 日本での縫製関係の家内工業
ミシンがけをする福順（中央）

婚という原則に反するので結婚に反対した。そこで、福順は父に頼んで、父の知り合いの慶州李の養女になった。一九五七年四月に福順は奉雨と結婚した。出会って五カ月後のことで、奉雨二〇歳、福順は二一歳だった。福順は結婚後は「石原福子」という通名をつかった。

結婚後は、生野区林寺町（鶴橋からは電車で二駅）で縫製関係の家内工業をはじめ、ベビー用品、ブラウス、ワ

ンピースなどの婦人用衣料を製造した。一九五八年に長女の幸子、一九六〇年に次女英子、一九六四年に長男史好が生まれた。（次男の恭秀はのちに、一九七四年に日本で生まれる。）一階が工場で、二階が住居だった。奉雨は裁断、福順はミシンがけという分担で、五・六人、人を雇っていた。車もテレビも電化製品もあり、忙しくはあったが、それなりの生活をしていた。仕事が軌道に乗ってきている時に、親戚の勧めで韓国に引き揚げる事になった。

二 韓国への帰国と苦難の始まり

一家挙げての韓国への帰国

一家は一九六八年八月一四日に韓国に引き揚げることになった。韓国では当時、服はあつらえるのが一般的だったが、既製服への切り替えの時期で既製服はこれから韓国で伸びるから、韓国に来て事業をおこし、一旗あげたかどうかと奉雨の親戚からの誘いがあったのである。また、全羅北道にいる姑から「自分は韓国で死ぬつもりだ。大阪で頑張るのもよいが、こちらに土地があるし、帰ってきたらどうか」という手紙も来ていた。姑は一九一九年生まれで、当時は五〇歳になるうとしていた時だったが、長男で一人っ子の奉雨は、いずれは母の面倒をみなくてはならないという気持ちもあった。



写真8 奉雨パスポート用写真
(1968年)



写真9 パスポート用写真(1968年)
左から英子、史好、幸子



写真10 福順パスポート用写真
(1979年)
福順43歳、次男恭秀3歳

奉雨三一歳、福順三二歳、長女の幸子は小学校四年一〇歳、次女の英子は小学校二年八歳、長男の史好は四歳だった。引き揚げのつもりだったので、ミシン二〇台、糸、チャック（ファスナー）、ボタン、そのほか家庭用電気製品などたくさん船便で送った。引き揚げ家族には荷物の優遇措置があった。一家は大阪から飛行機に乗り、ソウルについた。福順の父母は、南北に分断され、現在は休戦中というものの、戦争がいつおこるか分からず、またベトナム戦争に韓国からも派兵しており、今後どうなるか分からない状況だと言って帰国には反対したという。

ソウルで既製服の工場開業・一年後の倒産

ソウル市のヨンドンポ（永登浦）の工業団地で、既製服の工場を開業した。人件費が安かったので、二〇一三〇人雇って、事業をしたが、その当時は既製服よりあつらえの洋服のほうが値段が安かったため、結局、一年で倒産した。韓国の経済事情もほとんど分からず、言葉もできない、タイミングも早かった。日韓を往復していた、既製服製造をすすめた親戚は信頼できる人だったが、本人が面倒をみるのではなく、人に頼んだのでその人にもだまされた。

韓国に戻った時に、奉雨と子ども三人は永住権を放棄した（写真11の帰国証明願参照）。福順だけは、日本に父母やきょうだいがおり、当時は永住権を放棄すると日韓を行ったり来たりすることが困難な状況であり、父母が日本の永住権を手放すのを反対したこともあって日本の永住権を残した。実際、日本の永住権をなくして韓国籍になった場合は、日本に行くには招聘状が必要で、また韓国でも日本に逃げないことを保証する人をたてなければならなかった。

제 992호

귀국증명원

1. 본적 清道北道 朝天道 北村里 582

2. 주소 서울특별시 永登浦区 楊坪洞 287

3. 외국에서의주소 大邱市 野邑 材務所 2-33


4. 성명 李奉雨

7. 직업 縫衣 大人服

5. 성별 男

6. 생년월일 1958. 11. 25

8. 본국출입원일 1968. 8. 16



성명	생년월일	성별	본인과
李奉子	1958. 11. 25	女	長女
李英子	1960. 7. 22	女	次女
李英好	1964. 11. 17	男	長男

일시귀국여부

귀국일	출국일
영주귀국	

위와 같이 1968. 8. 16. 日 日本国으로부터 日航 JAL 편으로 귀국하였음을 증명하여 주시옵기 바라나이다

원인 李奉雨

법무부 김포출입국관리사무소장 귀하

위 증 명 함

19 1968. 8. 16

법무부 김포출입국관리사무소장

출입-25 (귀국증명원 경시16)

写真11 帰国証明願

以下の順で記載されている。

1. 本籍 2. 住所 3. 外国での住所 4. 姓名 5. 性別 6. 生年月日 7. 職業 8. 本国出国年月日

同伴者（3人の子どもの生年月日、性別、続柄）・一時帰国理由（永住帰国）

上記のごとく1968年8月14日 日本国から日本航空 JALで帰国したことを証明してください・年月日・署名

法務部 金浦出入国管理事務所長 貴下

上証明する 1968年8月16日 金浦出入国管理事務所長印

当時は、首都ソウルであつても日本との格差は大きかった。福順たちが韓国に戻った頃の日本は、一九六四年に東京オリンピックがあり、東海道新幹線が開通、一九六八年には日本のGNP（国民総生産）が世界第二位になり、一九七〇年には大阪で万博が開催されるなど、高度経済成長まっさかりの時期であつた。一方、韓国は一九五〇年代の朝鮮戦争によつて壊滅的な打撃を受け、深刻な窮乏と南北分断の状況にあり、休戦中とは言え緊張状態であつた。当時は一人当たりの国民所得からみて最貧国の一つだつた。ベトナム戦争に韓国軍も兵士を派遣しており、また、経済状況も日本とは比べ物にならないほど遅れていた。⁽⁹⁾

長女の幸子は当時の様子を次のように語っている。

「日本と比べて、見るもの、触れるもの、すべての質が落ち、劣悪な状況だつた。裸電球で暗かつた。市場にいつでも品物は少なく、ノート、鉛筆も品質がよくなかつた。また、北朝鮮のスパイを見つけたら申告するようになるという貼り紙があり、そのためのポストがあちこちにあつた。乗り物や市場の人の多いところには、スリが多かつた。父も母も私たちきょうだいも何回もスリの被害を経験している。乞食も多かつた。貧しかった。生活必需品が日本のように多く売っていなかった」。

幸子は学校ではいじめにもあつた。「私なんかも韓国人だけど、日本帰りということで、日本人、日本人とみんなから、からかわれたり、いじめられた。小学校四年の二期期から入ったんです。中学校に入ってから韓国語が達者になつたので、日本帰りというのが分からなかつたけど。最初の頃は石を投げられたりした。日本人だと指さされた。日本から来たということで珍しいので、みなついてくる。トイレまでついてくる。持っているものが日本製なので、ジロジロ見られた。お父さんはやさしい人だから、なんでも、しょうがないじゃないかと言

う。お母さんはそういうお父さんがはがゆい。韓国ではお母さんは言葉も通じないし、親戚もない。大阪に行くと言葉には不自由しないし、隣近所、親戚、友達もいっぱいいる」。

夫の田舎に移る・田舎での不適応

事業が倒産し、韓国に来て一年後、姑がいる全羅北道の井邑という田舎に移った。農業の経験がなかったので、姑の農業を手伝うことから始まった。姑の家の宅地は六〇〇坪あり、田畑もたくさんもっていて田舎では金持ちの部類だった。

韓国での生活、とりわけ田舎での生活に福順は適応できなかった。それについて福順は次のように語っている。「日本と比べると、天国から地獄に落とされた感じ。日本ではピューと押したらガスが出たでしょ。湯沸かし器でお湯が沸くでしょ。ここは井戸から水をくみ、薪でご飯を炊く。お風呂もないし、苦勞した。風呂場をつくってなんとかしようとしても風呂を沸かす機械がない。電気は通っていたけれど、電気では高くてお湯を沸かせない。それだけの知恵もないし。逃げようという一念が強かった。なんとかして日本に帰りたい。言葉は分からない。環境が全然違う。経済が遅れているので、日本と全然違う。そして現金収入がない。働くところがない。なんでもしたいができない。まず、日本人と見られるから怖い。

田舎の家は、みんながうらやましがるくらいの地主だった。九〇マジキという日本では九〇反（一反は三〇〇坪）にあたる田圃があった。こんな土地はちょっともっていないんですって。財産があったけど、私は見向きもしなかった。そんなことより日本にみんなを連れて帰りたいというその一心。田舎にそんなのがあったって何に

もならない。お金にしたってなんぼにもならないんだけど、田舎の人にしたらすごい金持ちでしょ。お姑さんは一人で人を使ってそれだけに増やした。一人だったからやっていけたが、私ら家族がいつべんに行ったから、一人で食べていくのと違って、五、六人が食べるのはやっていけない。それと、田舎は一年に一遍、収穫の時しか収入がないんです。現金がない。またお店もない。魚など食べ物もみな売りにくるんですよ。行商人が来たら買えます。日本から持っていったテレビや冷蔵庫があるのは、うちだけ」。

福順は、ともかく韓国、とりわけ田舎には適応できなかった。福順がかつて暮らしていたのは大阪という大都市で、人に囲まれ、歩けばすぐ店があった。日本では電化製品も豊富で、便利な生活だった。また、言葉がでず、文化習慣も違った。夫や子どもは日本の永住権を放棄したが、福順は父母やきょうだいが日本にいた。いったん永住権を放棄したならば、日韓の往復はとても難しくなる（日本の親族等からの招聘状があれば日本に渡れない）ということもあり、福順のみ永住権を保持していた。また、ビザの切り替えに、はじめは三カ月、次は六カ月、ついで一年と、一度は日本に帰国しないといけなかった。⁽¹⁰⁾

長女の幸子は当時の福順の様子を次のように語っている。

「お母さんは韓国には頭から適応できない。来たとたんに不渡り手形をつかまされてだまされたから、もう不信感でいっぱい。いいかげんだし、無鉄砲だし、自分のものは自分のもの、人のものは自分のもの。一九六八年というのは貧しい時でしたから。どろぼうも多かったし、北朝鮮からのスパイも来ていた。そのうえ、一年後には事業に失敗して田舎に行くことになり、そこではやったこともない農業をしなければならぬ。母は祖母が期待している農業をテキパキこなす嫁ではなかった。電気釜（炊飯器）は持っていたが、他の人は持っていない。



写真12 田舎での姑と家族

左から幸子、英子、福順、史好、奉雨の母の高貞珍、奉雨



写真13 田舎の家の縁側に座る姑と英子
縁の下に鶏がいる

ご飯は外で薪で炊く。また、李家の家族にお手伝いの女性、農作業を手伝うために泊り込みで来ていた男性三―四人という電氣釜で炊いて間に合う量でもなかった。手伝いをする人からは、『奥様は何もできません』と馬鹿にされた。祖母は家族が増え、長男である父が戻ってとても喜んでいたかもしれないが、母が韓国になじめずに、日本の実家に帰ったり、日本で暮らしているような暮らしぶりが贅沢に見え、息子（父）に苦勞をかけると思っていた。塩をなめても夫婦は一緒に住まないとだめだ、なぜできないかと母を責めていた。祖母は節約をするのが当たり前で、本当につつましく暮らしていた。財産も増やした。祖母は悪い人ではないが、無駄遣いはしない人で、プロテスタントキリスト教の信者で、村の教会が建てられるくらい寄付をしていた。母に対する不満は派手にお金を使う、しょっちゅう日本に行っているというものだった。あの時は日本は高度経済成長期で、日本ではきょうだいも親戚もいい生活をし、在日の人は無視されたくなくて、高級な格好をしていた」。

また、福順は「韓国では在日韓国人、日本帰りはあまりよく見てくれなかった。反日感情も強く、日本人は過去あのようなことをしたと言われても、日本で生まれ育ったので分からなかった」と述べる。福順自身は、日本に対してはよい印象をもっている。「日本では母が日本人から朝鮮人と言われていたのは覚えていますが、幼い頃、日本人の友だちの家に行ったら生活が豊かだったので日本人であればよかったのにと思った。日本ではよくしてもらってかわいがられた」。

日韓を行ったり来たり・日本での仕事とミニ貿易（運び屋）

福順は、ビザの関係もあるが、日韓を行ったり来たりしていた。事業が失敗したので借金もあり、日本では家



写真14 井戸まわりと福順

真中にある白い筒状のものは井戸水の汲み上げ用のモーター
このモーターや蛇口は福順が日本から持ってきた



写真15 冷蔵庫と奉雨

冷蔵庫とコーヒーカップは日本から持ってきた
部屋の奥の本棚には日本の百科事典がおさまっている

内工業を営んでいた妹のところまで働いたり、「お手伝いさん」をしたり、いろいろなアルバイトをして稼いだほか、日韓を往復して、ミニ貿易（日本製品の運び屋）をした^①。韓国では海外旅行の自由化以前は日本製品の輸入が制限されていたので、個人的に頼まれたものを日本で買い、それにもうけをかけて売ったり、韓国の日本製品を扱う業者の注文を受け、日本で品物を買ってきた。洋服、傘、化粧品、薬、電気製品などである。象印のポット（魔法瓶）や電気釜は一人一つしか持ってこれなかった。電気製品は時代によって違うが、ソニーのウォークマン、ナショナルのくるくるドライヤー、テープレコーダー、カメラなどを持ってきた。同じものをいくつも持ち込むと、売買していると疑われるので、自分が使うということで持ってきた。税関でそれらの品物を没収されてしまったこともある。日韓のミニ貿易も利益があった時やなかった時、税金がかかって赤字になった時、取り締まりが厳しく一時休まなくてはならなくなった時もあった。あまり頻繫でも目立つのでよくなかった。また、個人的に頼まれて持ってきたのにいらなと言われたり、値段が高いので買えないと言われたこともあった。

幸子によると田舎にいた時は、福順は一カ月に一回ぐらい日本に行っていた。日本にいた時間の方が長く、田舎にはちよこつと来て、頼まれた品物を渡し、家族の顔を見て帰るといふ具合だった。福順はこのようにして、家族の生活を支え、借金を返していった。しかし、家族にとって、特に子どもたちにとっては寂しいことでもあった。

長女と次女は学校のためソウルに出る

一九七〇年には長女幸子と次女英子がソウルに出た。田舎には奉雨と長男の史好が残った。福順は主に日本に

いたので、家族は日本、ソウル、田舎という三カ所に別れて住んだ。

この間の事情は幸子によると次のとおりである。

「母は私たちが田舎の子の格好をし、全く田舎の子になっているのを見て、たまらなくなって、いやだったよ。うだ。また、田舎では学校で勉強するより、家の手伝いが主だった。そこで母は私たちをソウルに出さなければいけないと思った。ソウルにいた時に、学校側の配慮で、日本語のできる先生のいるクラスに入ったが、その先生に母が相談すると、その先生の家に下宿させてもらえることになった」。

幸子と英子は、一九六八年八月に韓国に着き、九月一日、二学期にソウルの小学校に転入した（幸子四年生、英子二年生）。そして翌年一九六九年の夏休みには祖母の住む田舎に移った。一九七〇年の三月からソウルの小学校（幸子六年生、英子四年生）に転校した。

幸子と英子は小学校の先生宅に下宿していたが、一年後に先生宅を出、福順が借りた知り合いの一軒家の一間（一部屋と台所）で、田舎からつれてきた若いお手伝いさんと一緒に生活をした。当時、人件費は安かった。お手伝いさんは若かったので、工場で働きたいと言いだし、二―三人変わった。⁽¹²⁾時々、奉雨が子どもたちを見にきていた。

一九七三年に福順は、隣の家が売りに出ているのでどうかという親戚の勧めで、ソウルに一戸建ての家を購入した。土地三七坪である。⁽¹³⁾子どもたちがソウルで学校に通っていること、安定した住まいの必要性を感じたことで福順が決断した。お手伝いさんを置いて、ここに幸子と英子が住み、史好も翌一九七四年に小学校四年の時、ソウルに出てきて学校に行くようになった。奉雨は田舎にいて、たまにソウルに来るというものだった。家のロー

ン、ソウルでの子どもたちの生活費、田舎の夫への援助など、福順の仕送りは続いた。幸子は、「私たちの生活費と住宅ローンの返済金をお母さんが郵便局に送金してくれたものを私が家計簿をつけて管理した。お父さんが田舎から持ってくるお金は多くなかったが、でも米は豊富だった」と言う。

奉雨の仕事

福順は日本ではアルバイトをし、日韓を往復して日本の製品を運び、韓国での家族の生活を支えた。奉雨は、幸子によると商才はなかったという。奉雨は母親の農業を手伝うことからはじまって、徐々に農業を機械化させていった。⁽¹⁾「田舎で農業をしはじめたら、日本では田圃に苗を植える田植えの機械ができていたから、韓国にもそういうものを持ち込んだらどうかということで、母が稼いだお金で日本から田植えの機械や耕耘機を持ってきたりして田舎に投資した。初めて在日韓国人が農業機械を持ってきたということで、ラジオや新聞で取り上げられた。韓国の農林部の長官がきて表彰状をもらった」と幸子は語る。一九七〇年から韓国でセマウル運動（農村振興運動）がはじまっていた。福順は奉雨から頼まれ、日本からいろいろなものを取り寄せた。幸子によると「父は農業でも新しいことをやる。しかし商才はない。父は手をつけるが長続きしない。日本の何々がほしいと言うと母が送る。それにも母の稼いだお金がつき込まれる。そんなことばかり。父は人によくだまされる。無口で、人の悪口は言わない。頼まれたらいやと言えない。家のことはほうっておいても、人のことをやる。離れて暮らしていたので母は家族に最善を尽くしていた」と言う。その後、奉雨は盆栽、ビニールハウス栽培、養鶏、養豚、野菜（トマトなど）の栽培、ブドウ栽培などもした。一番長く続いたのがブドウ栽培だった。結局は土地も、連



写真16 耕耘機と奉雨
日本の耕耘機に荷車を連結
前にある小さなタイヤは福順が日本から送ったもの



写真17 ビニールハウスと養鶏と福順
当時、韓国ではビニールハウスは珍しかった

帯保証人になってみなとられてしまった。今は本当に少ししか残っていないという。

奉雨は一九七七年からは、田畑を人に貸して、ソウルに出て、知人の経営する輸出用の洋服工場に勤務し、アドバイスをしたり裁断を教えたりした。

一九八〇年に英子は高校を卒業したが、大学受験に失敗し、ソウルと祖母のいる田舎とを行ったり来たりしていた。知人が小物のサンプルを英子に持ってきて、知り合いに配りたいので五〇個作ってほしいが作れるかと尋ねた。そこで、作ってみたところ、評判がよく、仕事としてやってみたらどうかと勧められ、まずはミシン一台から始めた。英子は手先が器用で日本語ができるので、日本の小物が載っている本をみて、注文を受け、近くにある空き工場を借り、中古ミシンを置き、家内工業的に始めた。そこに奉雨も加わった。英子のデザイン感覚と奉雨の技術がマッチし、小物入れから始まってカバンを作るようになり、数人の人を使って、南大門市場や東大門市場の店に置いてもらい委託販売をするまでになった。福順からの仕送りはカバン工場が軌道に乗るまで、家族の主要な収入だったが、それが軌道に乗ってからは、生活費は奉雨と英子の商売によるものが主となった。¹⁵⁾それでは、ここで、福順と佼成会について目を転じよう。

三 佼成会への入会と活動

佼成会に入会する

福順は日韓を行ったり来たりし、日本で働いたり、日本製品を韓国に運んだりすることで収入を得、それを幸

子に送り、幸子が家計を管理した。福順の願いは、ただただ夫と子どもを日本に連れ戻したい、日本に引き揚げさせたい、ということだった。福順は「韓国にいったん帰ったが、とうていついていけない。みんなを日本に戻そうと思った。佼成会への入会動機もこれ。その願いが叶うという方便で入会した。日本にみんなを招聘して、日本で住みたいという申請書を日本大使館に六回出したが、夫が韓国にいたのでだめだと却下された。お金もなかったがあきらめた。それがあつたおかげで佼成会と出合えたんですけれど。解決していたら佼成会と出合えなかった」と語る。

佼成会には一九七三年に入会した。所属教会は大阪教会である。福順を佼成会に導いたのは、福順のすぐ下の妹の太田俊子（在日コリアンと結婚）である。当時、佼成会の班長だった。幸子によると「母の妹が導きの親。あまりに苦勞するので、佼成会に行くことを勧められた。行くと初めに鑑定するみたいですね。鑑定したらしい。その時に家族を日本に引き戻したいということを言ったら、一生懸命やったら願いが叶うと言われた。そこで一生懸命やった」とのことである。

佼成会に入会した一九七三年は、ソウルに一軒家を購入した年でもある。この頃の悩みの深さについて、福順の日記の中にあらわれているので見てみよう。

一九七三年一月一九日 やつと念願の主人と一緒に日本に行けた。八月三〇日、飛行機に乗って。主人は日本の大阪がどうかわっていったと受けとめたかはわからない。でも私はやろうとしたことに対してやれた。人間しようと思えば、努力すれば可能であると私は悟った。約二カ月の旅行であつたが、とても忙しい

毎日だった。

二カ月の旅を終え、田舎に帰って来た。一月四日に田舎に着く。約二週間すぎた。今日一月一九日である。私の気持ちは落ちつかない。何故だろう。私の生きていく運命に、毎日不平不満なことばかり言っては生きぬいているみたいでならない。性格がそうなのだろうか。じっとしていられない性質なのか。何かしてないとたまらない。主人もいるし、子どももいるのに……。

一月二〇日 晩に胃が痛む。少し過労のもよう。食事が進まないところをみるとどこか故障らしい。人間は無理をするとすぐダウンである。特に私の身体は微妙なところがしばしばある。長生きできないかも……。でも人間、生きている時、出来るものはしておかないと。じっとしてはだめだ。努力しなくては。主人にばかり苦勞をかけてはいけない。夫婦ともに努力せねばならないのだ。やっぱり私がソウルなり田舎なりに往復せねば、私が駅馬車になり勇気づける人とならなければ。あ、私の人生よ、私の運命よ、そんなにあばれ馬の様にあばれず、じっとしてみれば。いくらあわてても、出来る時こそできるものであって、時期が来なければだめだ。でも、いつも前向きになってかまえる姿勢はわすれずに……。あ、今年もあとわずか。このまま何事もなく過ぎてくれることを祈りつつ、私のできるだけ努力をさせていただき、良き知恵と勇気を与えてくださいますよう。

一月二二日 朝めざめた。主人が入れてくれたコーヒー、パイをおいしくいただき、主人はそのまま豚と鶏のえさをやりに部屋から出る。そのあととなくすまない気持ちで胸がつまる。ふと日本に居る親姉妹を思い出す。そうだ、なんとかして主人を、この田舎から脱出させる方法を考えねばと、頭の中で何かが

ひらめいた。そうだこの田舎は誰か正直な人を見つけて貸してあげよう。お母さんは子どもと一緒にソウルに住んでもらうようにして、主人と私は行けばいいのだ。私は誰かに揉まれながら生きていかなければいけない人。生き甲斐のある人生をおくりたい。主人もこの田舎には大切な人かもわからない。またこの田舎にしていることによって多くの人が助かるかもしれない。そのかわり私達家庭はムチャクチャである。家庭を大切にしてこそ、社会に役立つと私は習った。私は私の考え方、想像力、実行に移して見たいと思います。どうぞ勇気と力をお与えください。

一月二二日 主人は午前一〇時過ぎに家を出て井邑（注・近くの大きな町）に行きました。親睦会らしいです。午後七時にもなろうとしているのに、まだ帰ってきません。もう少しすると終バスもなくなるのに、お酒でも飲まされて気分でも悪くなっているのかしら、それとも何かあったかしらなど、いろいろあてもないこうでもない心配している私。いつもこんな心配ばかりしている私。私はいつもこんな思いで生きていかなければならないのかしら。いつも悩み、愚痴をこぼし、必死に考え、拳句の果てに祈り、いつも倭成会にしがみつく自分。本当にいつもありがたいと感謝しています。これからはくよくよせず、がんばります。

一月二三日 主人と一緒にソウルに行くつもりである。……キムジャン（注・初冬に行われるキムチを漬け込む行事）に使う唐辛子を頼まれたので、ソウルへ持って行ってあげないといけない。……田舎もだいぶ寒くなった。ソウルも寒くなったと思う。子供達がかわいそうだ。父母の愛情なしに育ってくれているのが何よりありがたい。でも史好が一番案じられる。末子であると同時に、生まれた時から親の縁の薄い子である。いまだ父母と一緒に一年（三六五日）一緒に住んだことがない。今年の誕生日（注・十一月一七日）

は汽車にのってオバサンといっしょに田舎へ来てしまった。でも明日、来る二五日は幸子の誕生日。その日は史好も一緒にしてあげよう。あわれである。特別ごちそうはないけれど、父母に囲まれてハッピーバースデーでも歌ってあげたい。ゴメンネ。いつも忙しい忙しさと逃げ回る母親を許してください。

これらの日記には福順の悩みが出ているが、子どもたちにとっても母親と別れて暮らすことは寂しいことだった。幸子は長女として、家計のこともやり、妹や弟の面倒をみていた。しっかりしているようだが、それでも心の中は寂しかった。「お母さんは日本に引き揚げようと思って色々情報を探していた。どうやったら永住帰国した人をもう一回日本に戻すことができるかと。いつかは家族で日本に住めるようにと頑張ってくれていた。そういうことはわかっていても、お母さんがいなくて子どもとしては寂しい。来ても一〇日くらいしかない。韓国に来て、お母さんはまた日本に帰るのではないかな、日本に行ってしまうのではないかと不安だった。お母さんに韓国を好きになってもらいたい。お母さんはまた日本に行ってしまうのではないか。日本のものを母が売っていたら、お母さん、韓国でもこんなものを売っているよ、と韓国に根をおろせるように言ってみたりした。お母さんは、ゴメンネ、幸子頼んだよ、と言って日本に戻っていった。お母さんがいないので自分がしっかりしなければと思っていた。愛情が欲しいときだから、史好が一番辛かったのではないかと思う。お母さんが日本で佼成会の組長をしていた時は、韓国に来て（日本にいる）導きの子の心配ばかりするんです。はよ帰らなあかんと。お母さん、どちらの子どもが大切なの？と喧嘩したこともある」。

長男の史好（一九六四年生まれ）は次のように語る。「母とは余り一緒に住んだことがない。中学生、高校生

の思春期のころ、母はたまに韓国に来ては日本に帰る。いつもは帰る時は空港まで見送りをしていたが、寂しいので今日は家で見送りをします、と言ったら、お母さんの目が真っ赤になって、しかし笑顔を返してくれた。お母さんは、ゴメンネ、すぐ帰ってくるからね、と言った。その時お母さんも苦勞しているんだと分かった。高校生の頃だった」。

佼成会の組長になる

福順は家族を日本に戻したいという理由で入会し、活発に活動を行っていた。一九七八年九月に、福順は大阪教会堺北支部の組長になった（石原福子名で）。一九八〇年五月には本尊を拝受した。一九八二年一月には、大阪教会で一年間勉強をして（佼成会の選名の石原通衣という名で）教師補の資格を得た。

福順の所属する大阪教会は、西日本の布教拠点としての意味合いをもつ教会だった。福順が入会した一九七三年には関西本部修養道場としての大阪普門館（東京の本部にある普門館に対応する名称）の地鎮祭が行われ、組長になる前年の一九七七年には落慶式が行われた。¹⁶ すなわち、福順が入会したのは、大阪普門館建設に向けて、積極的に布教が行われた活発な時期であり、組長の役についた一九七八年は、組長の練成会が開かれる等、布教組織の拡充と積極的な人材育成がなされた時期だった。

福順は次のように述べる。「組長の時は一生懸命、導き、手どりを頑張った。教学の勉強もした。日本で、導いたのは一〇〇人以上になる。佼成新聞を配った。道場当番もした。主任さんのもとで、総戒名の安置、年回供養にも、お供修行をした。佼成会の教えはすごいなあと思った」。

次男の誕生、母の介護と佼成会活動

日本と韓国を行ったり来たりしている間に、一九七四年一月に次男の恭秀を日本で出産した（次男は特別永住権がある）。福順は日本にいる時は大阪の堺市にある父母の住む実家に住んでいたが、次男が生まれてしばらくしてから実家の母（一九〇六年生まれ、一九八六年死去）が中気で倒れた。そうなる仕事には行けない。それまでは日本にいる時は、家内工業をしている妹のところを手伝ったり、さまざまなアルバイトをして働いていたが、介護のため、アルバイトもできなくなり、ミニ貿易（運び屋）で頻繁に日韓を往復することもできなくなった。福順は子育てをしながら、母の介護をし、父の面倒もみるようになった。母には貯金があった。また長男である弟はその当時不動産関係の仕事をしており、商売は順調で父母に毎月仕送りをしていた。そこで、母の面倒をみるかわりに定期的に母の貯金と弟の仕送りの中から小遣いをもらうことになった。福順は母の介護をしながら、佼成会の活動をした。父の面倒をみるといっても、父はまだしっかりしていたので、父に母のことを頼んで佼成会の活動をした。教会には出してもらった。ある意味で佼成会の活動をするには好都合だった。

幸子訪日し、佼成会と出会う

一九七七年十一月、高校を卒業した幸子は、韓国に帰国後初めて、招聘状を得て日本を訪問した。福順は熱心に佼成会の活動をしていた。この時のことを幸子は次のように語っている。

「高校も出たし、日本に一度行きたがっていたから母が招聘してくれて、一〇年ぶりに堺に住んでいるおじいちゃん、おばあちゃんの所に行った。その時にはお母さんはおばあちゃんの面倒をみていた。中気で倒れたおば

あちゃんの面倒をみながら堺市の北支部の主任さんの右足、右手になって一生懸命布教していた時期だった。『石原さん、頑張ったから、娘さん来たね』なんて、佼成会の教会長さん、事務長さんやみんながかわいがってくれた。

大阪普門館に行った時に、大きな行事をやっていた。その時に、制服を着た学生が不良から立ち直ったという体験説法をした。その話がとても共感する話だったし、説法会が終わって法座をやるんです。私はお母さんについて、お母さんの地区の法座に入ったら、『祈願供養の満願に娘が来た』とみんなに私を紹介してくれました。そうしたら、みんな泣いて喜ぶんですよ。そんな姿みたことないですよ。そういう人のうれしい出来事を泣きながら喜びを分かちあうとか、なんだかすごく温かい雰囲気私にバーストと入ってきて、佼成会が韓国にあったらしいなあとと思った。その時は韓国にあるともないとも聞いていなかった。ただ韓国にあったらいいなあとと思った。福順とともに幸子は、その後、韓国佼成会を担っていく人材になるので、幸子の日本での、この体験は重要である。幸子は二カ月間、日本に滞在して、一九七八年一月末に帰国した。幸子は大学受験を控えた妹英子、中学生の弟史好の母親役をしていた。

一九七八年一〇月に、友達の家からの帰りにバスの窓から「立正佼成会」という大きな看板を見かけた。一二月に福順がソウルに来た時に一緒にそこを訪ねたところ、開所に向けて準備している最中だった。福順は自分が大阪教会所属であることを述べ、「娘です。日本語もできるし、韓国語もできます。何かお役に立てることがあれば使ってください」と言った。それで翌日から幸子は事務所の手伝いに行くようになった。このようにして、幸子は佼成会の韓国連絡所の初期からかわかることになった。

四 韓国における佼成会

韓国佼成会の概要と日本人が布教することの困難

幸子は韓国佼成会に開設当初から関与することになったが、福順が韓国に戻り、韓国佼成会にかかわるようになる背景の理解が必要である。そこで、韓国佼成会の展開について概観しておこう。^①

一九七九年二月に佼成会の韓国連絡所の入仏落慶式と開所式が行われた。一九八〇年一月には「在家仏教韓国立正佼成会」と名称を変更、一九八二年に連絡所から教会へ昇格した。一九八三年五月「大韓仏教法華宗佼成寺」としての寺院登録、一九八八年五月現在地に自前の教会道場完成、一九九八年「自主独立団体・在家仏教韓国立正佼成会」として、日本の佼成会と姉妹結縁した。韓国佼成会の展開過程を規定するものとして、その底流にあったのが、日本と韓国との関係、すなわち反日感情に起因する布教現場での困難で、日本からの派遣教会長に対するビザの問題がからんでいた。

一九七九年に日本から滝口文男（一九三三年生まれ）が布教師兼連絡所長として派遣された。開所式のあと、滝口、幸子（事務員として）と管理人一名という体制で始まった。滝口はビザの関係で短期間の滞在しかできないため、日韓の往復を繰り返さざるを得なかった。（一九七九年から一九八五年の六年間で五六回日韓を往復している。）

韓国佼成会の初代教会長になった滝口の時代は、ビザの点からみると、短期の観光ビザでの日韓を往復した時代（一九七九―一九八二年）、大韓仏教法華宗の傘下に入り、長期の研修生ビザでの布教時代（一九八三―一九

八五年）という時期に分けられる。当時の韓国では、宗教はもとより日本からの文化の流入に対する警戒があり、合法的なかたちでの布教活動は困難で、日本の植民地支配に起因する反日感情の問題など、日本にルーツがある宗教が韓国で布教することには問題を抱えていた。そのため、一九八三年には便宜上、大韓仏教法華宗の傘下に入ってビザを取得した。一九八四年一〇月には滝口は一年のビザが切れたため延長申請を行ったが、その時、出入国管理局の調査が行われ、法華宗研修生としてのビザであるにもかかわらず、研修以外の活動、すなわち布教をしているということで、滞在目的違反に問われた。結果的には申請二カ月後に六カ月の延長許可がおりたが、滝口は根本的に佼成会が韓国に根をおろせるような対策を講じなければならない、という感を深くし、同年一二月の本部への活動報告に、教会長の韓国における滞在資格変更の検討が必要であることを述べている。また、学生運動のリーダーたちがキリスト教系宗教団体の中で活躍しているという情報から、外国人布教師に対する動向調査が、出入国管理局から一斉に行われ、一九八五年三月一五日に、出入国管理事務所審査課より二名が、調査のために佼成会を訪れた。翌三月一六日に滝口は出頭し、調書をとられ、一九日には滞留資格外活動（滞留資格が法華宗の研修僧侶であったため、研修以外の布教はしてはならない）に対する警告書を渡され、滞留期間である四月二一日までに出国するように申し渡された。

滝口は、一九八五年四月二〇日に出国して日本に帰国した。六カ月の研修生ビザを取得して、六月二〇日に再度、韓国に入国した。七月以降、滝口は弁護士や行政書士に、韓国佼成会の単独登記の可能性や教会長滞留ビザ取得の件について調査を依頼した。また、今後の布教のあり方を教会運営会議で検討した。本部に対しては、韓国人による韓国布教の体制を確立するように検討してほしいと繰り返し要望した。



写真18 大韓仏教法華宗佼成寺時代
左から福順、佼成会本部海外布教課林
課長、滝口



写真19 在家仏教韓国立正佼成会の
看板の前の福順

滝口は活動記録の中で、一九八六年にはアジア大会、一九八八年にはソウルオリンピックと韓国で大きな世界的なスポーツ大会が開催されるので、韓国では治安の確保のため取り締まりが厳しいこと、そして韓国は日本から多量の文化が入るのを恐れており、日韓文化協定がなされていないので布教が困難であることに言及している。

また、この頃、学生示威運動が頻発し、とくにキリスト者がそれを先導しているところから、外国人布教師、宣教師が厳しく監視されている状態であり、したがって在日韓国人幹部を養成、または現地信者を招聘教育し、布教にたずさわることが望ましいと思われると述べている。また、日本から観光ビザで訪韓した学生がソウル大学で学生運動のリーダーになり、デモなどを行い逮捕されたニュースが発表され、そのため思想的な活動動静調査が厳しくなり、とくに布教師、宣教師等は一番先に目をつけられる状況になった。

こうした背景のもと滝口は入国管理法違反（滞留資格外活動）、すなわち、これまで大韓仏教法華宗の研修生としてのビザを二回更新していたが、研修僧侶としての学習をせずに、布教をしていたという理由で帰国命令が下り、一九八五年二月二〇日、滝口は日本に帰国した。

翌一九八六年一月に滝口は観光ビザを申請するが却下され、要注意人物としてブラックリストに載っていることが分かった。そこで今後の韓国布教について本部で検討し、責任役員会議で韓国人による布教に決定した。以後、現地人による現地布教という基本方針にもとづき、韓国での布教を推進することになる。

福順に対する韓国への帰国の要請・韓国主体の居住となる

日本人が韓国で布教をすることの困難さを認識した滝口は、在任中、大阪教会で組長として活動していた福順

に対して、「日本にはたくさん幹部がいるが、あなたが役に立つのは韓国の佼成会だ」と韓国に戻り布教をするように説得した。韓国に戻った場合、仕送りができなくなるので、その点で逡巡していたところ、滝口が囑託として本部から給与が出るように交渉すると言ったことが、福順が韓国に戻る大きな決定要因となった。しかし、一九八二年に韓国に帰国したものの、囑託としての給与が出るようになったのは一九八六年のことになる。この頃には夫と次女がソウルでカバン工場を始めており、仕事が順調に行くようになって、経済的にはそれで生活はできるようになった。また、家族を日本に戻したいという福順の願いは、夫が韓国にいるというケースなので実現不可能だということが分かった。「日本にみんなを招聘して、日本で住みたいという申請書を日本大使館に六回出したが、夫が韓国にいたのでだめだと却下された。お金もかかったがあきらめた」時期でもあった。また、福順が七年間母親の介護をしてきたが、三人の子育てが一段落したということで、弟の妻が父母の面倒をみることでできる状況になったことも帰国を可能にした。

福順は一九八二年二月に日本で生まれた七歳の次男とともに、家族のいる韓国に戻った。次男は小学校二年生から韓国の小学校に入った。日本を出る時、当時大阪教会の教会長だった庭野公利から、「組長というより、教会長の気持ちで」とはなむけの言葉をもらった。一九八二年一月に日本で教師補資格（石原通衣名で。石原に対しては佼成会の選名が通衣）を得ていたが、同年六月に入神の資格（戒名を書くことができる資格）を韓国で得、その時、李福順という名前に対して、日本の佼成会から李京子という選名を授かった。一九八四年二月に、福順は滝口から主任の役をもらった。当時、幸子は事務長だった。この頃のことについて福順は、「滝口さんがいた時にはカバン持ちでただついていくだけだった。教会長の手伝いをするという感覚だった。戒名は付けてみるよ

うにと言われて、本を見ながらつけてはみていた」と語っている。

一九八二年に韓国に戻ってから福順は、永住権や父母もいる関係で、年に一―二回は日韓を往復した。なお、一九八三年一月には佼成会の会長（当時）庭野日敬が韓日宗教者学術会議に出席のためソウルを訪問、ホテルで会員の集いが開かれた（写真20・21）。

一九八五年一二月に滝口が入管からの取締りを受け、帰国したが、それについて福順は「子が親から捨てられた感じがした。それまではいずれは韓国に帰っておいでと言われても、韓国で骨を埋めるとは思っていなかった」と述べている。

本部は日本人による布教は難しいことを認識して韓国人による韓国布教の方針を決定し、一九八六年にソウルで開催されたACRP（アジア宗教者平和会議）に来韓した庭野日鑽（現、会長）から、直々に福順は支部長の任命（六月一日付）を受け、本部の囑託として給与が支払われるようになった。ここに、韓国での現地人による現地布教という本部分針が具体化したのである。しかし、福順が支部長に任命されたというものの、幹部は全くなかった。支部長のもとに主任ができたのは、一九八八年のソウルオリンピックのあと、一九八九年に海外旅行が自由化され、招聘状なしに日本に自由に行くことができるようになり、本尊拝受者が出てからであった。

教会長は不在であっても、教会道場建設については、本部はすでに決定し、それが具体化する時期になっていた。一九八六年三月には、ソウルにある会員所有の土地を本部がごく安価で購入し、在家仏教韓国立正佼成会名義で登記した。また、同年六月にはACRPが開催され、会長の庭野日敬と次代会長の庭野日鑽（いずれも当時）が来韓した。庭野日敬と日鑽はその際、道場建設予定地を見学している。



写真20 1983年韓日宗教学術会議に出席するために訪韓した庭野日敬会長による指導
左前列2人目が奉雨、右前列左1番目が福順



写真21 金浦空港での庭野日敬会長との記念撮影
右から2人目が幸子、3人目が福順

一九八七年二月に道場建築許可があり、一二月に竣工式が行われ、翌一九八八年五月には庭野日鑑次代会長の臨席のもと、新道場の入仏落慶式が行われた。また、掛け軸型の絵像ではなく立像の本尊が入った。⁽¹⁸⁾立像の御本尊が入った立派な新しい道場に、堂々と人を連れてこられるので、信者が喜び安心したという。

福順は「滝口教会長が帰って、自分たちがやるしかないと思った。しかし、この教会道場ができる前（一九八八年以前）は、⁽¹⁹⁾気持ちがどっちつかずで、日本に帰りたいし、かといって捨てておくわけにはいかないという感じだった」と語る。

本部団参の開始と本部からの講師派遣

ソウルオリンピック開催年の一九八八年には現地韓国人で初めて一名の本尊勧請者が出た。李福順も本尊の上位にある守護神を拝受した。翌年の一九八九年には海外旅行が完全に自由化され、招聘状なしに日本へ渡航できるようになった。⁽²⁰⁾本尊を受けるためには日本の本部に行かなければならないが、これによって本尊勧請者も増え、創立記念日、お会式といった行事にかけての本部団参（団体参拝）が始まった。

その後、年に三―四回、日本から講師が派遣され、研修が行われた。本部からの講師派遣は、会員のみならず、福順と幸子にも意味があった。それまで研修をあまり受けていなかったもので、幸子は通訳をしながら勉強した。話の持っていき方などのテクニクを学んだ。レジュメの作り方も参考になった。また福順にとっては、自分たちが話していることが間違いなかったと確認できることも大きかった。

一九九〇年には青年部が発足、本部の海外布教課職員が出張して青年の錬成に力を入れた。一九九一年には六

月に本部大聖堂で、虚空蔵菩薩ご命日式典で福順が説法をし、十一月の次代会長への法統継承式では幸子と史好が献灯献花を行った。一九九二年には教会発足一〇周年記念式典が挙行された。また、プサン支部長に呉愛鳳が任命され、ソウルとプサンと二支部体制になった。

滝口の帰国は教会長不在をもたらし、韓国佼成会にとって痛手だったが、ACRPでの庭野日敬と日鑽の韓国訪問、新道場建設に向けての信者の熱気、新道場が建設されたことによるやりがいというプラスの要素が多い時期だった。また、韓国の海外旅行の自由化によって、日本の本部に本尊勧請に行くことが可能になり、本部団参も開始された。また、本部からも講師が派遣され、教会長不在の韓国佼成会にテコ入れが行われた。このように、時の流れとしては、韓国佼成会にとってむしろポジティブに働く状況だったことが、幸いしたといえる。

法人格取得をめぐる問題

韓国佼成会の長年の懸案事項に法人の問題がある。法人格取得の問題は、正式なかたちで安心して布教をしたということと、何より教会長を派遣してもらいたいという福順と幸子の願いによる。

一九九三年九月には、八年ぶりに教会長として中川貴史（一九三七年生、当時五六歳）が派遣された。一九九二年に再度社団法人を申請し、とれそうな状況になったとの判断で、早めに教会長の派遣を依頼したのである。中川は九州にある田川教会との兼務教会長だったので、観光ビザで年に三回行ったり来たりした。しかしながら結局法人格はとれず一九九四年の一二月に中川は退任した。基礎に日本の仏教団体であるということがあったので認可がおりなかった。

一九九六年には出入国管理法違反の容疑で、韓国校成会が警察の取り調べを受けるという事件が起きた。⁽²⁾ 実際、警察に押収された書類の中に、福順が日本の宗教団体である校成会から支部長に任命されていることを示す辞令があり、日本の支部ではないか、それなら日本の支部として外国人団体登録をしなければならないと言われた。日本の本部からの財の支援が問題になった。これに対しては、結局、出入国管理法違反ということで罰金を支払った。この時に、日本の本部から送金はできないということで、管理費（プサン支部の管理費と人件費に使用）とともに、福順の給料も打ち切りになった。これについては福順はショックで悲しくモヤモヤした気持ちが五年くらい続いたと述べる。支部長になって本部から手当てが出るようになり、信じて任せてくれている、自分も信頼にこたえたい。教えを生き甲斐としてやってきた福順にとって、給料がなくなったこと自体よりも、仲間から外されたようで寂しかったのではないだろうか。

法人登録については、日本の支部として外国人団体登録をするようにと言われたため、手続きをしようとしたが、韓国人ばかりで、外国人がいない韓国校成会は外国人団体登録に当てはまらないと言われた。そこで法人格は得られないということが分かり、これまではなんからの方法で教会長を日本から迎えることができるのではないか、という漠然とした期待を抱いていたが、福順と幸子は自分たちが校成会を担うという肚が決まったという。

一九九七年に韓国校成会の理事会を設立し（理事長・李奉雨）、任意団体として文化体育部に登録した。翌一九九八年一二月に、日本の立正佼成会と自主独立団体としての韓国校成会（在家仏教韓国立正佼成会）は姉妹結縁した。幸子によると、独立したとはいえ、戸籍から抜かれたようで複雑な思いがあった。理事会で韓国教会を守って頑張ろう、そんな雰囲気だった、という。

なお、プサン支部については、複数の在日韓国人経由での布教が行われていたが、内部分裂したので、いったん布教を停止し、二〇〇一年からソウル、すなわち福順の主導のもとに仕切り直しをした。⁽²³⁾

二〇〇二年一〇月に韓国佼成会では教会設立二〇周年式典が行われ、同一二月の韓国佼成会の理事会で、李福順支部長が教会長に任命された。それに伴い、ソウルに、龍山支部、城北支部、儀旺支部という三支部がつくられた。

福順は日本の佼成会の会長から正式に教会長の辞令をもらいたいと念願していたが、二〇〇七年十一月、海外教会長会議で訪日しており、会長より辞令の授与があり、涙を流して喜んだという⁽²⁴⁾（写真22・23）。

李一家と佼成会

日本からの派遣教会長の滝口が去ったあと、韓国佼成会を担ってきた李一家の役割は大きい。福順は支部長・教会長・顧問として、幸子は事務長・総務部長（教務部長を兼任）・教会長として、教会を支えた。奉雨は、教会道場の管理人として、陰役で地味ではあるが、教会にとって重要な役割を果たしている。⁽²⁵⁾ 教会の管理を以前は二人体制でやっていたが、そのうちの一人が一九九三年に仕事を始めるために辞めたところに、奉雨が入った。道場では二人で交代に宿直をしていた。もう一人の人が高齢でもあり病気で倒れたので、自然と奉雨一人で管理を担当することになった。奉雨は建物管理、消防の管理としての資格も取得した。

しかし、一人では交代要員がいないので、李家の家族が交代で泊まるようになった。（奉雨は宿直の間。福順と幸子は応接間で）。自宅から教会道場にはバスで約一時間三〇分かったが、そこには英子一家が住んでいる。



写真22 庭野日鑛会長から教会長任命状を受け取る（2007年）

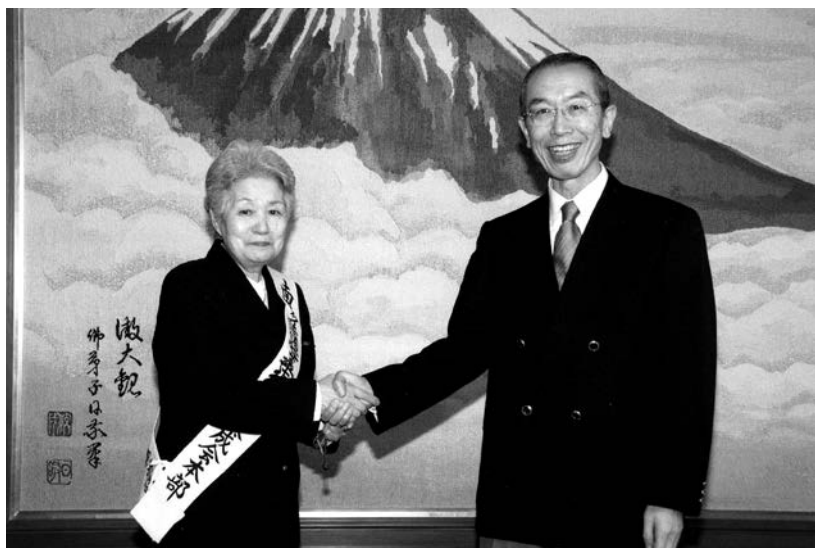


写真23 念願がかない涙ぐむ福順

夜に信者も来るので、信者中心に合わせた。しかしプライベートがなくなってきたので、二〇〇二年に福順が教会長になったのを機に、教会のそばのマンション（1LDK、約六五平方メートル）を借りて住むようになった。奉雨は誠実、正直な人柄で、争いを好まず、でしゃばらず、無口で、噂や人の悪口を言わない人であった。しかし、人をよく観察していた。また福順や幸子のやることを応援した。福順と幸子が日本の本部やプサンに布教に行く時も、安心してあとを任せることができた。奉雨は教会でも家庭でも徹底的に陰役であるが、韓国佼成会にとって重要な役割を果たしている。

一九九七年に任意団体として「在家仏教韓国国立正佼成会」が設立された時には、奉雨は理事長に就任したが、一九九二年に福順が教会長に任命されることになったため、理事長が同じ一家から出てはいけなかったのではないかと、理事の李春吉と理事長を交代した。したがって、福順は李春吉より教会長の任命を受けた。

それでは、次章から福順が韓国でどのようにやってきたのか、その内容に視点を転じよう。

五 李福順の困難・葛藤・自己形成

福順は、「大阪の時には自分が変われば人も変わるところまではいっていない。一生懸命やれば病気が治るとかといった、交換条件の信心の時代。ご利益信仰だった。自分の本当の修行は韓国に来てから」と述べる。福順の人生にとって、佼成会の果たした役割は大きい。言いかえれば、佼成会の信仰や韓国佼成会を担う使命感によって福順の人生が規定されてきたともいえる。そしてまた、韓国佼成会にとっては福順、そして幸子という

人材を得たことは幸いであり、彼女たちがいてこそその韓国倭成会であるともいえよう。今日、倭成会韓国教会は海外教会の中でも最も堅実かつ着実に布教が進展している教会になっている。

福順の人生にとって倭成会との出会いは、その一生を決めるものになった。再度概観しておこう。福順は韓国に来て不適応になり、日韓を往復するなかで、日本に家族を連れ戻したいという一心から一九七三年に日本で倭成会に入会した。一九七八年からは日本では組長として活動した。日本人の韓国布教がビザの関係で難しい状況になり、福順に白羽の矢がたち、教会長の滝口から韓国に戻ることを依頼され、一九八二年に韓国に帰国した。最初は教会長の手伝いをするというつもりだった。一九八四年には滝口から主任の役をもらったが、一九八五年末には滝口が入管の取り締まりを受け、日本に引き揚げざるを得なくなった。一九八六年から本部は現地人による現地布教の方針として、同年六月に訪韓中の庭野日鑑から支部長に任命された。教会長不在のまま、福順と幸子は倭成会を担っていく。しかし、この時期は追い風もあった。日本人教会長はいなかったが、一九八七年から道場建築に入り、道場が建設されるということで、希望をもった。また、一九八八年に道場ができて、うれしくやりがいがあった。そして一九八九年から海外旅行が自由化され、日本の本部に行くビザがとれるようになった。それによって本尊勧請者が出、福順が一人支部長であった時代から主任の役をする人が出た。そうしているうちに講師が日本から派遣され、教理を学んだ。そして、法人格をとれるのではないかとということで、一九九三年から短期日本人教会長が派遣されたが、とれないことが分かり、一年後に退任した。そこで、福順と幸子は、韓国立正倭成会を自分たちが担う肚を決めてやりはじめたのである。二〇〇二年には福順が教会長に任命された。

福順は日本では組長までだったが、その体験をもとに、韓国での文化的な相違を認識し、工夫を行った。福順



写真24 教会の事務室での福順と幸子（2004年）

は幸子とよく協力しあって、日本の本部からの講師派遣による研修や日本での研修、機関誌・紙から学びつつ、二人三脚で韓国佼成会をつくりあげていった。

福順にとって、有利な条件は、永住権をもつ在日韓国人だったことで、日韓を行ったり来たりできた。また幸子にとっても福順の招聘で日本に行くことが可能であったので、一九八九年の海外旅行の自由化まで好条件だった。また、福順の人生経験、料理上手、四柱推命による鑑定、幸子という存在も力になった。幸子は日韓両国語ができ、学ぼうとする気持ちの強い有能な女性である。福順と幸子の場合は、親子という関係がポジティブに働いた。また、幸子は福順の韓国語の教師としても重要な役割を果たした。

在日コリアン二世である福順は、幸子の言うように、アイデンティティは日本人だと推察される⁽²⁷⁾。韓国佼成会の道場に入るとその雰囲気には日本的なものを感じられる。また信者の立ち居振る舞いも日本的である。

しかしまた、韓国佼成会では、日本の佼成会にないものを採用している。

次に福順の心の葛藤も踏まえ、韓国でどのような点に文化の差を感じ、また人を育成するとともに自己形成していったのかをみていきたい。また韓国佼成会は長らく事務長のちに総務部長をつとめ、現在は教会長である長女の幸子との共同での取り組みでもあるので、福順のみならず、幸子にも着目する。福順が法座や個人指導を担当しているのに対して、幸子は教学や運営部門を担当しており、いわば福順が情であるなら、幸子は知といった相補う役を果たしている。

福順の困難・言葉の問題

福順が佼成会を担うにあたって困難だったこととして、まず挙げたのは言葉の問題であった。福順は在日二世として生まれたが、日本では通名を使い、生まれ育った家庭でも父母とは日本語で話していたので、知っている韓国語はオモニ（お母さん）、アボジ（お父さん）くらいのもだったという。福順は、「私の苦労は言葉」と繰り返し述べている。

「どのようにして佼成会の教えを伝えられるか。それにはまず言葉。言葉が豊かに使えらるると、その人にふさわしい方便力が自由にできる。そうすると韓国人の心をつかむことができる。言葉で伝えられるようになって、反応があった。私の言うことはこういうことなのだけれど分かる？という思いが常にあった。悩みへの説き方は基本的に日本と同じ。日本と韓国は似ているところがたくさんある。教えを言葉で伝えられるようになって、法座で結べるようになった時はうれしかった。その前は幸子に聞いてやった。韓国人と一体になるには、まず自分

が韓国人にならなければならない。そのためには、まず言葉。そして、何でも好きになること」と福順は語る。法座は、はじめから言葉がチンプンカンプンの時からやっていたという⁽²⁸⁾。

新道場ができた一九八八年頃は、福順はまだ韓国語で教えを説くのは無理だったと述べる。言葉は幸子から習った。福順の言葉の足りないところは、幸子が足した。福順は、幸子と親子だったからここまでこられたと述べている。しかし、言葉のことは福順にとってストレスだった。「法座のやり方は大阪でやったそのままをやってきた。当時の大阪教会は生き生きとしており、法座には迫力があつてすぐに結果が出た。今の韓国教会もそうだ。しかし、（結果ばかりでなく）心が救われていかなければならない。心を育てる。仏心をつくる。成仏とか人格完成という前に、心の使い方、思い遣り、目配りが大切だ。夫や子どもが何を考えているかピンピン分かるように」。法座は実生活と結び付いた相互作用によるものだが、福順が苦手としたのは説法であつた。「以前はご命日の時に説法台に立つて話すのはいやだった。仏教の用語を韓国語に直す時、訳をよく忘れて言葉がでなかった」のである。「心が定まったのは言葉ができるようになってから。伝えたいことは心にいっぱいあつても相手に伝わらないのが辛かった」と述べる。

福順は、「信者は体験したことは聞く。人間は体験しないと人は救えない」と言う。言葉の問題がなくなった時、在日コリアンの夫と日本で結婚し、韓国に戻った後の事業の失敗、借金苦、嫁姑の関係、夫婦の関係、さまざまな人間関係の問題、家族と離れての生活など福順の人生上のさまざまな苦勞が、むしろ資源として、信者の心をとらえていった。佼成会が日本から来た宗教であることは、はじめから言う場合と言わない場合がある。しかし、人間の抱える苦についてならば、日本も韓国もないのである。



写真25 初期の道場で降誕会「花まつり」の説法をする福順



写真26 法座で指導をする福順（1990年頃）

方便としての四柱推命

福順が布教の「方便」として用いたのは、四柱推命（四柱とは生まれた年・月・日・時）である。韓国人は運命を鑑定してもらうことに関心があり、巷には哲学館とよばれる、四柱推命の鑑定所がある。佼成会には九星という鑑定法（気学）があるが、そこでは生年月日を用いる。四柱推命ではこれに生まれた時刻が加わる。福順は大阪にいた時に、九星を使う支部長に出会って関心をもち、勉強したことがあった。また福順の父は、韓国の僧侶からもらった本で、四柱推命を使って人の運勢も鑑定していた。⁽²⁹⁾こうした基礎のもと、福順は四柱推命を布教に使用した。

福順は次のように語っている。「一〇〇ウォン（約一〇円）で、すごくよくみってくれるところがあるといって、始めたのが布教です。⁽³⁰⁾こういうかたちで方便を使ったのは大きいです。信者さんがそういう方便を使って人を連れてきてね。四柱推命で運命をみる。よくあたるんです。最初から法を説いても分からないから、この因縁をなくすには功德を積むしかないと言うんです。⁽³¹⁾入り口はこれですよ。まず四柱推命をみてもらったら、法座ですね。法座に座ってもらっているうちに、先祖供養、家庭での実践、がんばって当番に入ること、徳を積むこと、これが全部勉強できるんです。そういう風にもっていったことが、私は多かったですね」。

福順はその人だけではなく、問題によっては家族全員の四柱推命をみた。また、一回みるだけではなく、繰り返し問題が起きるので、その数は多数に及ぶ。四柱推命をみる場合は、支部組織体制がきちんとしてきてからは一対一ではなく、導きの親、所属支部の支部長、主任など、その人の面倒をみる人を立ち会わせている。福順は四柱推命を方便として用いつつ、言葉を学習しながら法座での結びを行っていた。また、法座のあと個人指導



写真27 四柱推命の鑑定をする福順

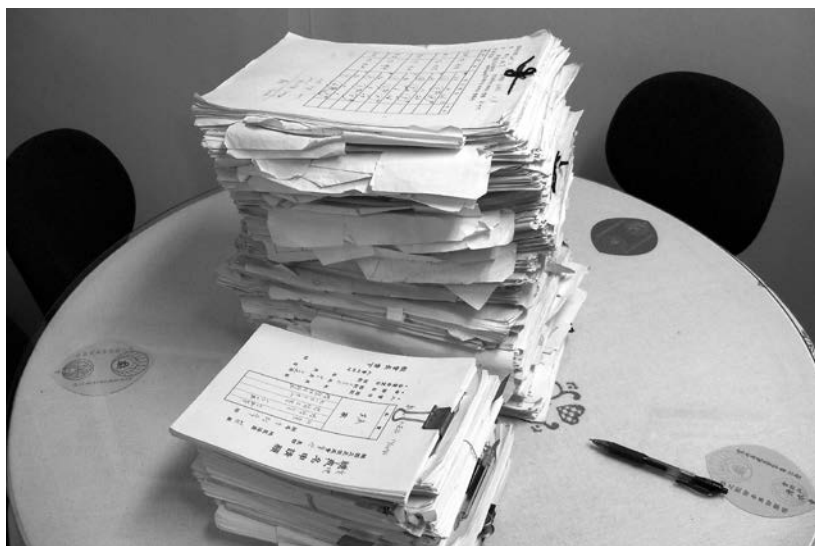


写真28 李福順による四柱推命の鑑定カルテ

も行っている。個人指導については、信者から「結んでほしい」と言われた時に対応する。個人指導も一対一ではやらない。「証明役」を伴わせる。これは教会になつてから、二―三年後に問題が出たので、複数の人を同席させるようにしている。しかし、四柱推命や九星はあくまでも方便で、よくあたっているので入会するといつても、入ったあとは現場の主任や支部長が根気よく「手をとる」しかないとのことである。

佼成会の教えや実践について、分かりにくいものは何かとの筆者の問いに、「分かるまではみな分かりにくい」と答えた。佼成会の教えや実践の中には独特のものや日本的なものもある。日本とは異なる文化の中で、また反日感情が根深い中で、日本的なものの文化的違和感を減少させる必要がある⁽³²⁾。以下では佼成会の教えと実践の根幹にかかわる先祖供養と在家仏教について、福順がどのように説明しているのかについてみてみよう。

先祖供養と祀り込みの困難さ

韓国佼成会で直面した課題のひとつに先祖供養の問題がある。佼成会に入会したらやるべきこととして、総戒名を祀り込む、朝夕の供養をする、法座にすわるということを福順はあげる。しかしながら、佼成会式の先祖供養は韓国人にとって分かりにくい。文化的に異なる。佼成会では入会したならば総戒名⁽³³⁾（現在は額装本尊）を自宅に祀り込む。しかし、これが韓国では実に難しい。そのこと自体に大きな抵抗がある。韓国において儒教に基づく先祖祭祀を重要視するが、これは父系男系の先祖祭祀である⁽³⁴⁾。

佼成会の先祖供養は双系の先祖を供養する。これに対して福順は次のように説明している。「子どもにはお父さんの血だけではなく、お母さんの血もつながっている。それは科学的にも説明されている。それに、嫁いだ先

だけでなく、実家も一緒にご供養してもらえると云ったら、ああ、実家のお母さんの供養をしたかったので、ありがたいと言う人もいた。これは女の人たち。男の人はそんなの関係ありませんと言う。

韓国の風習では長男がその家の先祖を祀る。次男や三男が入会したときに、先祖を祀れと言ったら、長男が祀っているので私たちはいいですよ。ちゃんと長男がしていて、私たちは命日に行つてそこでちゃんとしていますから、と言った時には、また説明を付け加えますね。それは儒教のしきたりとしてはそうだけれど、校成会で言っている先祖供養は、お経をあげて先祖の成仏を願うことだから、五人子どもがいれば五人のうち誰がやってもかまいません。娘でも息子でも。これは親孝行をする方法の一つです、と」。

こうした説明の追い風になったのは韓国の家族の変化である。核家族になったこと、少子化、子どもに男子がない家族も増えた。財産も長男だけではなくすべての子どもに分配するようになった。長男がキリスト教徒になり、先祖供養をしなくなったなど、かつてとは違う状況になった。

それともう一つ抵抗があるのは、総戒名を家に祀ることだ。⁽³⁵⁾それについて福順は次のように言う。「なぜ、かたちとして祀らなければいけないのか。まして長男がご供養しているのに、なぜ私がなくてはならないのかという問いが出る。今では四柱推命をみたら、すぐに総戒名を教会の戒名室に祀り込むけれど、自宅に祀り込むのは難しい。自宅に祀ると鬼神が入る。悪魔が入る。なぜ静かに眠っている霊を呼び起こすのか。⁽³⁶⁾家にそのようなものを祀って、たたりがあつたらどうするのかと言われる」。

韓国では自宅に仏壇を置き位牌を祀る習慣はなく、また総戒名は短冊状の紙で、線香立て、蠟燭立てといった仏具を置き、祭壇をつくつてそれを祀るので、それがムードン（韓国のシャーマン）の祭壇を連想させ、霊を使つ



写真29 戒名室で行う各家の追善供養
右端のダルマが置いてある下の引き出しに総戒名が納められている



写真30 総戒名を書いている福順

て何かをしているのではないかと思われるため抵抗がある。

個人宅に総戒名を祀ることへの抵抗感を減じる方策として、韓国校成会では教会にある戒名室で個人宅の総戒名を預かるという方法をとっている。戒名室とは、戒名をつけたり、総供養（三代までさかのぼった先祖の供養）、追善供養（個人）をする部屋で、日本の校成会にはなく、韓国独特のものである。そこには引き出しのある箱があり、各自の総戒名はそこに封筒に入れて納められており、追善供養や総供養の時は出して供養する。⁽³⁷⁾ 自宅に安置することは難しいが、総戒名を祀り込んで、戒名室に安置するということは受け入れられるようになった。それはなぜかという点、これをやったら結果が出るという方便を使うからだ。

先祖を祀ったら家の中がゴタゴタするのではないかという問いに対して、福順は「なぜ私たちの先祖が鬼神なのか、自分が死んだら先祖になるが、鬼神とか悪魔とか言われたら納得するのか。家の中に先祖を祀ったら魔が入るというなら、なぜチェサ（儒教式の先祖祭祀）をやるのか。校成会では霊（鬼神）がきたら、単にそれを放り出すのではなく、ご供養し、感謝の気持ちで、安らかにすることによって成仏させ、守護霊と変えることができる」と説く。総戒名の祀り込みをするように説得するには、まず祀った人が受けた功德を説く。祀ったら結果が出るという方便を使うので、戒名室に総戒名を祀り込むのは割合と早い。⁽³⁸⁾ このように先祖供養や自宅への祀り込みへの抵抗への対処をしている。福順が言うように「分かるまではみな分かりにくい」のである。戒名室に総戒名を安置するようになったのは、本格的には一九八八年以降（教会道場ができてから）であるという。なお、戒名室では総供養（複数の先祖の供養）、個人の追善供養を行うが、「信じてやれば、結果が出ますよ。総供養というのはすばらしいですよ」とその功德を語ることでできる「証明役」がいるとよいという。

在家仏教・法座・サンガ

韓国仏教は出家の仏教なので、在家仏教を認識させるのが大変だった。伝統仏教では一日と一五日が参拝日で、僧侶の説法会があり、それを聞いて、それから寺で昼食を食べて帰ってくる。その時持っていくのが米と蠟燭と布施である。ところが佼成会では、命日、道場当番、法座修行など教会道場に出てくる日が多い。非会員からは、なぜお寺に頻繫に行くのと尋ねられる。そして、僧侶に供養してもらったり、受け身で話を聞くばかりでなく、自分たちで供養し、また法座を行う。佼成会は伝統仏教ではなく、「現代仏教」「生活仏教」で、出家ではなく在家だと説明する。

法座は佼成会の命といわれる。「伝統仏教には聞いたものをみんなで具体的にかみしめ合って、どうやって生活化するかという法座はない。それが佼成会にあるからみんなすぐ、すっかりしたみたい」と幸子は言う。韓国佼成会では本部に準じて六の付く日は休業日だが、それ以外は毎日法座がある。朝一〇時から經典読誦供養、四〇分に終わって、それから一二時まで法座をする。一日と命日では支部ごとに分かれるが、それ以外の日は福順を法座主とする大法座が行われた。海外では毎日法座を行うところは少ないが、韓国佼成会はほぼ毎日やっている。また休業日以外は道場当番があり、三支部に分かれて各支部が月に九日程度担当していた。当番以外の人も道場に来るが、韓国佼成会では命日は支部長が法座主になって支部別法座を行うが、通常の時は、道場当番の導師（主任）が中心に座って、その隣に福順が座る。福順が法座主となる大法座が開かれる場合もある。支部長は福順のフォローをする。三支部になってからは、支部長は、六日、一六日、二六日の休業日以外は基本的に毎日二〇―四〇分、教会長の福順と総務部長の幸子と三支部長がミーティングをし、手どりの報告を聞き、心構え



写真31 福順による大法座での指導



写真32 立春の日（2月4日）にその年の九星と心構えを教示する福順（2010年）

や、本部から打ち出されたことを福順から伝える。このような綿密な連絡とかかわりをもっている。福順と幸子は休みなしに献身的に佼成会の活動をしてきた。午前中、福順は毎日法座に出、午後は個人相談を受ける。支部に分かれたとはいえ、福順と信者の距離は近い。

それではここで、筆者が観察した法座での福順の結びの例をあげよう。二〇〇七年八月四日の開祖命日の時の大法座である。福順は「佼成会ではサンガ（信仰の仲間）が宝だ。私もサンガのおかげで生きがいを感じて生きている。開祖さまご命日のお役をしてくれてありがとう。すべてのおかげさまという気持ちで、心の温かい人、素直な人になれるようがんばっていきたい」と述べた。次いでその日の供養で協導師として木鐘の役をしていた人が、「木鐘のお役は他の時はやっていたが、ご命日でのお役は初めて。やっていて背中から汗をかいた。こうしたお役をするのはありがたい。間違えなくできたか心配だった。けれども緊張が人を成長させるので、お役が来た時には素直に受けてやっていかなければならないと思った」。太鼓の役の人がそれをフォローする。「私もご命日のお役に緊張した。太鼓の打ち方にドキドキした。二三日前からがんばろうと思って、練習もたくさんした。練習の時、みんなが大丈夫だと言ってくれた。お役を受けた時は感謝の心でがんばる」。こうした当日の当番の役の人の話を皮切りに次のような話が出た。

「娘は小学校五年生だが、自分が外に行くとき心配する。電話がしょっちゅう来る。電話代がかかるのでそれを夫が怒った。娘は行方不明になった人のニュースを見て不安になって、お母さんは本当にお寺にいますかと心配する」、「（福順）娘さんがお母さんを心配するというのは、どういうことか。これは娘さんではなく、ご主人が

心配しているのをみせてくれているのではないか」「娘には、お寺に行っていると説明している」「（福順）娘さんにだけではなく、今日お寺に行きましたとご主人に言いなさい。そうしたら大丈夫だと思う。これは夫婦間のことだと思う。最近変わっていつているので、ご主人が心配しているのではないか」「主人には電話やメールで伝えても反応がない」「（福順）娘さんがいつも不安を感じるということは、ご主人が妻に対して不安がある。ご主人に対して徹底的に尽くしてみたらどうですか。あんた、おかしいのかと言われても、一度やってみたらよいのではないか。そうされたら、ご主人もうれしいんじゃないですか。一回やってみましょう。学んだことを家庭にもっていつて。本当に行をやっていくのは家庭だから。朝のあいさつからがんばろう。今日は開祖さまの命日ですが、開祖さまが生活に役立つ法を説いてくださらなかったら今はない。本当に感謝させていただきましよう。娘さんじゃないですよ、ご主人さまでですよ」「主人は私に不満も疑いも多い」「（福順）ご主人のほうに心を向けたら、娘さんは大丈夫ですよ。娘は嫁に行ったらいなくなるのだから、最終的には夫婦が仲良く生きていかないとだめ。子孫が追善供養してくれると思ったら、生きていても死んでもありがたい。中有の中で迷わずいいところにいけるように。自分の心配は仏様にあずけて、人様の心配をしましょう」。

これは一つの事例であるが、娘の話から、その奥にある夫婦間の問題をえぐりだし、その対応を示した。これに支部長、主任などサンガがフォローし、「手どり」をしていく。

福順は、「地球のどこでも佼成会に入会すればサンガです。佼成会のサンガは親子のようなものです。だから安心します。遠慮もしません」と述べる。「日常生活に戻ると人間、限界がある。やろうと思っても顔をみたとたんやりたくなったりする。そんなときにはサンガが、『どうだった？ 今日できた？』『できなかった』『そ

れじゃ明日またがんばろうね」とか、『祈っているよ』とか、アップする人もダウンする人もいろいろあるけれど、アップしている人がダウンしている人に力を与え、励ましたりする。お互いに持ちつ持たれつでやる。入会したらサンガですよ」と語る。

しかしながら、このようなサンガをつくるには、それなりの苦労があった。そこには韓国人の価値観や行動様式の違いがあった。現在の韓国成会をみると非常に日本的でもあるし、ホウレンソウ（報告・連絡・相談）が行き届いている。また大変きちんとしている。

韓国人と日本人の価値観・行動様式の違い

福順は韓国で信者に対応するにあたって、日本人と韓国人の違いを感じた。福順は両国を比較して次のように述べる。

「日本は団体行動がすごい。団体の結束を重視する。韓国は一人一人は強いけれども団体行動は苦手。日本人はその人の前ではあまり言わないが、裏で言う。韓国人の性格はストレートで言いたいことはみんな言う。けれどさっぱりしている。裏ではあまり言わない。ぱっと喧嘩をしても、すぐ仲直りをする。韓国人は盛り上がるが、すぐさめる。情は深い。弱い人には同情する。弱い人を助けてあげる。最初はつきあいにくいけれど、心を開いたらいい。いいかげん。適当。きっちりするということに慣れていない。時間の約束ができない」。

特に時間の感覚について福順と幸子は苦労した。そのことについて福順は次のように語る。

「時間にルーズ。午後行きますと言ったら、一時から八時のあいだ。私の場合は日本の感覚だから、午後といっ



写真33 手どりで『韓国佼成』を渡す



写真34 支部長と手どりに歩く

たらそのまま待つんですよ。何時と言っておいたらよかった。来ないので電話を入れたら、すみません、明日にします、と平気なんです。今は午後の何時に来ますかと聞くようになった。○時ならいいけれど、○時からはいないから、その間は別の仕事をするから、この時間よ、とも言えるようになった。日本はあんまりきっちりしすぎています。特に佼成会は。一〇時にきっちり始まって、一〇時何分にお題目とか決まっている。韓国の信者は時間に遅れても言い訳を言って、すみません、がない。一〇分前に座っているのが日本帰りの人たち。遅れても、失敗しても当たり前、へいっちゃら。一時、時間の感覚が違うのでボーッとしてしまったことがあった。けれども今をみると二〇年間耕してきた土が柔らかくなった。今はみんな時間をきちんと守る。そうでないと時間を殺してしまいますから」。

また、もう一つはホウレンソウ、すなわち報告・連絡・相談である。今はホウレンソウも行き届いているが、そこに至るまでは大変だった。

幸子は次のように言う。「教会長さんが結んだあと、次の日に、教会長さんが昨日の結んだ答えどうだったの？と聞く。結んでもらう時は藁をもつかむ気で来ていたのに、次の日、ケロっとしているわけですよ、みんな。その時教会長さんから言われて、御守護かかりましたとか、まだだとか、そういうのを何回かやっているうちに、自分にも身についてきて、それを信者さんにもやっているみたい。ホウレンソウというんですか、報告・連絡・相談というのが訓練されてくる。なんで報告が必要なのか、『お通し』をする必要があるのか、初めは分からなくて、抵抗を感じる人も多いです。結んでもらって、報告、連絡するということは自分のやっていることに対して、間違いないかどうなのかの確認でもあり、いい知恵をもらえることがある。声をかけたら報告に来る人も

いるが、最初は来ない人がほとんどだった。今では、教会長さんに報告しただけでも安心するんですね」。

また福順は、「日本の風習では、『昨日はどうもありがとうございました』とか言いますよね。私たちも日本育ちだから、それが身についている。韓国ではお返しという風習もなかった。品物を誰かに届けてもらうでしょ。何も言ってこないで聞いたら、ああ、もらいました、で終わり。ちゃんと届いて、もらってくれたのかなあと心配する。日本の習慣が校成会のおかげでいい習慣としてみんな身に付いた。今では、昨日はありがとうございました、こうやっていただきました、と言うようになった。やつと当番の報告ができたり、誰々さんがこうですとか報告がくる。悪いことは相談に来るでしょ。そのあとどうなったかということ言ってくれる人は一〇人のうち二―三人かな。人に心配かけたら、相手が心配していることを思わないと。連絡ないから心配した。私、心配で、毎日ご供養にそのことを入れていた。ところが、いやあ、すみません、だった。お通しですね。確認とか、お礼とかはしてほしい。これをしつこいくらい説いてきたんです。だからやつと、たとえ小さなことでも報告してくるようになった。それが感謝に変わってきた。そういうのが身に付くまで、支部のなかで置きっぱなし、忘れっぱなし、だった。伝えるのも肝心なところに伝えなかつたりね。途中で終わって手が届かない。ハウレンソウが修行とともに身に付いてきて、その重要さが分かってきた」。

福順は二〇〇二年に教会長に任命され、翌二〇〇三年から新たに三支部の組織に分けた。一三人の主任の中で、導きの数でも突出していた三人を支部長に昇格させた。支部組織にしたのは福順一人では人数的にも手が届かなくなってきたからである。地域単位での分け方だが、導きの系統とも重なっていた。支部組織への適応期間は一年間かかった。そこで分かったのは、韓国人は組織に慣れていないということだった。このことは先述のハウレ

ンソウの問題とも関連している。支部を単位に道場当番を行うようになり、一支部が月九日から一〇日担当するようになった。三人の支部長はその人の氣質を踏まえつつ福順が育てた。

韓国佼成会では、導き、手どり、經典誦誦、当番、法座修行、みな同じく重視しているが、役の昇級に必要なものは、導きの人数より活動だという。教会での法座修行、道場当番、命日への参加、教会での総供養や追善供養など教会に出てくる活動を重視する。この中でも当番は導師・協導師などの役割分担とともに、積極的に関与していく場としても重要であり、当番が終わったあとの法座には福順も座る。午後は、福順は個人指導にあたる。信者は総供養などがある時は戒名室で供養をしたり、外に信者の手どりに出たりする。

韓国人信者の育成

韓国人の信者が佼成会に魅力を感じているのは、第一に、生活実践、第二に、温かいサンガ（仲間がいて寂しくない）、第三に、自己犠牲（自分のことを思ってくれ、相手が自己犠牲してくれる）、第四に、きつちりしている、整理整頓が行き届いている、教会の雰囲気がいまいであることだという。第一から第三の点は、これまで福順がことに力を入れてきたことであつた。「支部長を中心に主任が力を合わせて手をとる。すごいですよ。離さない。総合病院の医師が同じ患者さんをみるみたいな感じで。そして同じ体験をもっている人が、自分の体験話を力よく言う。私も昔そうでしたよと。悩みは人ごとではなく、聞いてもらえる」と述べる。それも幹部みんなが最初からそうではなく、何回も訓練されてきて身に付いてきた。韓国佼成会では導きより手どりを重視しているというが、下の人に育っていない人がいる場合は、手どりの繰り返しである。「あの人はどうなっているの?」、「知

りません」、「声をかけてあげてよ」といった具合に、福順が支部長や主任を育成し、そして彼らが組長や一般会員の面倒をみる。

「みんな私のサンゲです」というのは分かりにくい。相手を責めるのではなく、出てくる現象はみな自分に因があり、自分自身に原因を求める言説が校成会にあるが、これはなかなか受け入れられない。こうしたことを納得させていくのは地道な活動がある。たとえば夫が浮気したり、夫に暴力を振るわれて、それでもあなたのサンゲです、みんな自分です、と言われたらびびくりするし、受け入れにくい。こうしたことを納得させることについて福順は次のように語る。

「何回も教会に足を運んでフォローして、やっているうちにハッと自分が気付く時がありますね。同じ体験をもっている人が自分の体験を言う場合もあれば、教学の因縁果報のことも裏付けになる。それいつも相手の立場を考えてみる。自分の考えを相手に押しつけるのではなくて、相手の立場ならどうかなって思いながらお願いするとか、聞くとかというふうにすると案外スムーズにいくんですね。そういうところがうまくいくというのは、宗教の力しかできないんですね。それは何かというと、自分が勉強しないと相手の立場というところまで心がない。それも校成会の教えで学ばないと。

暴力を振るわれた以前にいろいろな話をされたと思うんです。その人がそれをやりたくてやるのではなく、家の業、因縁を背負って、その人が代表で、家の因縁でそうなっているのかもしれない。『結婚した時にどうだったの、はじめから殴られましたか?』『そうじゃない』とかね。そうやっているうちに、旦那さんの生育歴を聞いたら、親が早く亡くなって寂しい思いをしたとか、愛情をもらっていなかったとか。ああそれでかなと、相手を理解す

る気持ちで湧いてくる。また、よりによって、そういう旦那とめぐり会うことも因縁だから、ご縁があるのではないかな、とか。子どもは自分一人では生めない。旦那は憎くても、そのおかげでかわいい子どもがいる。子どもはありがたい。それをつくってくれた元の主人はいやですというのはどうかな。この因縁が子どもまでおりたらどうしますか。相手の気持ち、相手のよいところを見ましよう。私たちは悪いところばかり、目に入るじゃないですか。いいところは全然ないですと言う人も、心の余裕ができると、見えてくるみたいですね。それは法座修行をしたり、祈願供養をやっていて、いろいろ話を聞いているうちに、心に余裕ができたなら、主人はお茶碗を洗ってくれたとか、子どもために〇〇を買ってきてくれたとか、前もそうだったんだけど、前はそれが感謝するべきこととして見えなかった。それが見えたら、『言葉でありがとうと言えた?』と聞いたたら、『全然』って。『自分が好きで買ってきたのに、なんで私が見えたいと言うのですか』、『一言でもありがとうと言ってみたらどうですか』、『はい、がんばります』。次の日、言えたかどうか聞く。言ったといったら、『どんな反応だった?』、『笑ってた』とか、『なんでありがとうと言うのかとヘンに思われた』とか。いろいろ現証があるじゃないですか。どう思ったかと言ったら、二度とやるまいと思ったとかね。まずやってみることを勧め、やったあと、どうだった?と聞く。

妻が佼成会に入って変わったので、夫がお札に來たこともある。佼成会では「心の勉強(マウムコンブ)」という。相手を変えようとするのではなく、自分を変えようとする心の勉強をし、福順による直接の指導とともに、福順に育成された支部長や主任が問題をもっている会員に寄り添っていくのである。



写真35 開祖生誕100周年世界団参の時の海外会員の集合写真（2006年）
うしろに見えるのは本部の大聖堂



写真36 世界団参お会式パレードでサムルノリを披露（2006年）

信者から見た福順

それでは信者には福順の指導や人柄はどうみえるのだろうか。二〇〇四年に行った支部長と主任のインタビューからみてみよう。多くは福順をやさしさと厳しさの両方をもっている人とみている。

「教会長さんは、最初は理論で整理してくれ、具体的な例をあげ、それを家庭で使えるように教えてくれる。因縁果報という真理をもとに、実際に人の悩みを聞きながら、その人の立場では実生活で教えを実践していくにはどのようにしたらよいかを具体的に教えてくれる」。

K支部長は、夫婦関係と嫁舅の関係の悩みから入会した。その時福順から次のような指導を受けた。

「主人と舅に真心をもつて接していたのか、感謝していたのかと教会長さんから言われた。相手を責めていた。朝晩、ありがとうございます、と大きくお辞儀をしないと。業を切らないと娘まで伝わってしまうと指摘された。主人がお風呂に入ったら、タオルを持ってお風呂を出るのを待って、タオルで足をふいてあげるようにと言われた。主人は初めは何をやっているのかと言った。教会長さんが、方法というか、実践の仕方を教えてくれた。そして今では今度生まれ変わっても夫と一緒にいたいと思うようになった。また舅にも自分が『下がる修行』をしてから手助けしてくれる人になろう」という。K支部長は、福順の指導を自分のものとし、支部のメンバーにも伝えている。

「導き、手どりをすると、相手は自分の鏡だというので、その人の問題や悩み、現状を聞くというふれあいの中で自分の過去がみえる。自分が過去、教えを知らなかった時の姿を、その人とおして懺悔する。また、昔教えを知らなくて過ごした時のことをその人とおして反省することもできる。新たな問題によって、自分が新た

に勉強もできる。人とのふれあいで気付いたこと、悟ったことは教会長さんに、今日、こういう出会いでこういうことを気付かせてもらったと報告したり、具体的にどういった実践をしていったらよいかをご指導いただいたりもする。そして自分が家のなかで実践して得た結果や心の功德とか実際の功德をまた、みなさんに分けてあげるんです」。

福順は「自分が体験したことを言う。夫、子ども、姑との関係は、あなたたちよりもっとひどかった。法をやっているうちにできるようになった。やってみて明日また返事をしてください。夫が謝ってきたと言えば、あなただからできた。私は一週間かかった」というように話をもっていく。福順のやり方に対して、信者は伝統仏教との違いを踏まえながら、次のように言っている。「最初はなぜあんなことまで人の前で言うのかとおかしかった。けれども教会長さんは家庭で具体的にどうしたらいいかを教えてくれる」、「すべてが自分だということは納得した」、「教会長さんは、自ら生活の中で実践している。伝統仏教は上のほうから言うが、佼成会は生活実践だ」、「自分が経験してわかる。同じ仏の教えなので、お坊さんも教会長さんも同じだが、お坊さんは生活実践がないから、心の奥底に入らない。お坊さんは物足りない」、「佼成会は信者の体験も教化力もある。実践で人を感化する点が違う。お坊さんは少し物足りない。真実は伝わるので、袈裟を着ていなくても伝わる。お坊さんには距離感がある。教会長さんはお母さんみたい」、「お坊さん、牧師さんの話はいい話だなで終わる。自分のものにはならない。佼成会の教えは自分のものになる。教会長さんはどう実践するかを教えてください。生きている法門だ」。

信者は、福順が伝統仏教の僧侶と違って、日常生活の中で自ら生活実践をしていること、他の宗教のように単なるいい話におわらず、具体的な生活実践を教えてください、その話を聞くとすぐ動ける点を評価する。こうしたこ

と以外に、福順は、女性信者たちが家庭をもちながら佼成会の活動ができるように、効率的な家事のやり方、料理の仕方、家の中の整理整頓の仕方も教えている。

韓国佼成会の信者たちは、福順や幸子の指導によって、方便からはじまり、教えの核心をつかむ人も多くなっている。また、非常に真面目に佼成会の教えを実践しているようにみうけられた。

幸子は、福順を「母は人への対し方が平等だった。頑張る人には惜しまず声援を送り手助けした。今は支部長がフォローするが、『強い指導』をしたあとは苦しんでいた。情がある人だった。自分がやってこうだったと言ってくれるので信頼できる。自分で実際やってみて勧めてくれるので安心だった」、「パートナーとして任せたら安心、間違いない。人を感情的に包むことは自分ではできないこと。細かいところまで思いやる、これも自分ではできないこと。母は自分を信頼してくれていた。休みはほとんどなかった。佼成会が中心だった」と述べている。

転機としての乳がん

ところで、時期は遡るが、福順にとっても、幸子にとっても、信者にとっても信仰上の転機となったものとして、福順が支部長時代の二〇〇〇年に乳がんになったことが挙げられる。福順はこの後、二〇〇二年に教会長になり、二〇〇三年に三支部制が敷かれるが、韓国佼成会にとってこのことの影響は大きかった。

福順は二〇〇〇年に日本に行ったときに、佼成病院での健康診断で乳がんが見つかった。一月五日にそれが分かり、二四日に手術をした。手術と最後の放射線治療も合わせて三カ月間入院した。福順自身も、乳がんを信仰上の転機として受けとめている。初めは乳がんが「仏の説法」とはとらえられなかった。しかし、そのおかげ

で、生死を見つめるようになり、死を近くに感じ、それだからこそ、毎日生きていることがありがたいと思うようになった。信仰に対する強い心が生まれ、布教に対する取り組み方が変わった。乳がんになってから、悩みをもつ信者の気持ちと一体になろう、救ってほしいという気持ちが強くなった。乳がんのおかげで「人さま」のことを考えると病気を忘れることも分かった。そして福順ががんになった体験は、がんを患う信者にとっても力になった。幸子が観察するように、乳がんを経験して、福順は韓国で骨をうずめる本当の覚悟ができた。

福順の乳がんは福順にとって信仰上の転機になったが、幹部にとっても、その自立と自己育成を促す契機となった。最初は、「支部長は修行しているのに何故がんになるのか」と信者は動揺した。ついで、福順ががんで死んでしまうのではないか、自分たちがしっかりしなくてはいけない、という気持ちをもたらしした。また病気が乳がんだったことで、「あまり今まで頼りすぎて、支部長さんのお乳を吸いすぎたからこうなった。親離れをする時期がきた」というような説法を信者がした。

幸子の場合、福順の乳がんという病気をとおして、「悩みが成長の種」であり、「悩みを乗り越えたら成長するから、頑張つてね」と信者に言えるようになった。頭だけでなく、実感として悩みをありがたくとらえることができるようになったという。

このがんが転移したものでかどうかはわからないが、福順は胆管がんで亡くなることになる。その間の事情を以下で述べよう。



写真37 釈尊降誕会（花まつり）の時、導師をする福順



写真38 古稀記念の日本旅行での奉雨と福順（2006年）

韓国教会設立三〇周年のあとの福順の病氣そして逝去

二〇〇九年十一月、長女幸子が教会長に就任した。福順は顧問に退いたが、幸子を助け、プサン支部へ月のうち一〇日行つて、プサンでの布教を担ったり、四柱推命をみるなど、協力を惜しまなかった。二〇一二年に予定されていた韓国教会設立三〇周年に向けての準備もした。しかし、九月一六日に行われた三〇周年記念式典の後、福順は左膝の痛みに悩まされるようになった。整形外科では膝の水を抜くくらいの治療で、福順は杖をついて歩行するようになった。また、ある時から眠れないと言ふようになった。医者から精神科に行つたらどうかと勧められた。氣力がなくなり、あれほど料理が好きだったのに、包丁を持つのもいやになった。教会道場には出て、一人がけの椅子にすわり、法座にも出てはいた。「顧問さんどうですか」と尋ねると一言二言答えてはいた。

二〇一四年一月に眠れない、心臓がドキドキすると言ふようになった。病院に行くかと幸子が尋ねると、福順は普段ならばいいと言ふのに「行きたい」と答えた。総合病院に行つたが、精神科の薬を飲んでいと言ふと、ほかにやることはないと言われた。六月に腰が痛くなり、この痛みは普通の痛みではないということ、病院に行った。検査の結果、胆管がんが見つかり、しかも脊髄に転移していることが分かった。六月からは入退院を繰り返したが、一〇月末に入院後、一二月一八日にホスピスに移った。入院中は昼は英子、夜は幸子が泊まった。⁽³⁹⁾

福順は二〇一五年二月七日に亡くなった。七八歳であった。最後まで頭はしっかりし、周囲にはありがとうと言っていた。三月二七日には四十九日の法要が行われ、日本から佼成会の理事長ほかが参列した。



写真39 福順の葬儀

左から、英子の夫、英子、英子の次男、同長男、幸子、史好の長女、史好、史好の妻、奉雨、史好の妻の叔母、恭秀



写真40 教会道場での四十九日



写真41 李家の墓

福順の逝去により、墓を新しくつくった

墓石に「古阜李公家族之墓」とあり、手前には福順の名前と生年没年が刻まれている



写真42 四十九日の法要のあとの墓参り

奉雨、史好、恭秀の3人の男性が韓国式に墓の前にゴザを敷きお参りする

おわりに

これまでみてきたように、福順の人生にとって、佼成会とのかかわりが大きな位置を占めている。しかし、福順は、人生の聞き取りの中で、幼稚園の園長先生の養女の話をつたえ、人生の分かれ目として受けとめており、また園長先生による日本の儀式儀礼のしつけがあつたからこそ、自分はここまでできたと認識していた。これについて幸子は、母である福順の人生の転機は佼成会に入会したことであると思つていたので、不思議に感じたと述べている。しかし、福順の人生を吟味すると、まさに園長先生の養女にならなかつたことが人生の岐路になつてゐることが分かる。なぜなら、養女になることを断り、幼稚園を辞め、姉の洋品店で働くようになって間もなく、夫となる奉雨と出会い、それも五カ月もたたないうちに結婚した。奉雨との結婚によって、その後、韓国への帰国（夫と子どもは永住帰国）、福順のみ日本の永住権を残しての日韓往還、家族との別離、そして、その問題によって佼成会入会に導かれた。したがって、園長先生の養女にならなかつたことが、人生の岐路であつたと回想してもおかしくはない。そして、もう一つ、園長先生との出会いが、福順の人生にとって重要であり、恩人であつたと認識されている点についても言及する必要がある。福順は、日本式の礼儀作法が身に付いたのは園長先生のしつけによるものと感謝している。こうしたことは一朝一夕に身につけることはできない。佼成会ではとりわけ儀式儀礼、礼儀作法についてきちんとしている。福順は、日本で佼成会に入会して、そこでの日本人会員との関係も、そして韓国で主任、支部長、教会長になり、日本の本部や上位の役職者とも直接かわりをもつようになって、どこに出ても恥ずかしくない振る舞いができることによって、園長先生のしつけのありがた

さを再確認したのではないかと思われる。

園長先生の養女にならなかったことが、福順を波乱万丈の生涯に導き、結果的には福順の人生にとって大きな果実をもたらした。佼成会への入会、そして、日本で大阪教会が伸びる時期に組長の体験をしたことを基礎に、それに福順の人生体験を加え、韓国という場で、苦労はあつても、生き甲斐のある人生が花開いたともいえよう。李家の存在は韓国佼成会にとって欠かすことはできず、李家の人々がいなかったら、韓国佼成会はここまで地道かつ着実な歩みをすることはできなかったと思われる。福順と長女幸子が表舞台に立ったとするなら、裏での活躍を支えたのは、夫の奉雨であり、次女の英子であった。奉雨は一時は韓国佼成会の理事長になったが、管理人として実直に務め、また英子は佼成会の役は組長であるが、長年、李家の経済的部分を支えた。李家の家族は二つの国にまたがって住み、故福順、奉雨、幸子、英子は韓国に、長男史好と次男恭秀は日本に居住している。史好は、韓国の大学卒業後、兵役義務を終えた一九八八年二月に、李家が守護神を勧請することになり、福順と奉雨とともに日本の本部に行った。その時に講師の話に感銘を受け、また、講師からの勧めもあり、日本語学校に三カ月通った後、教団の養成機関である学林の予科に入学し、その後本科（三年）を卒業し、教団本部の職員になった。海外布教課を皮切りにさまざまな部署で働いている。かつて放棄した日本の永住権は再取得した。史好は年齢的なものもあって、子どもたちの中で母親不在によって一番悲しい思いをした。前述したように高校生の時、母も苦勞していると感じて福順を許したが、海外布教課にいた頃、海外の教会長を迎える立場になった時、福順が法座をするのを見て「この人はすごいな」と客観的に思ったという。

恭秀は福順が日韓を行ったり来たりしていた時に日本で生まれ、その後韓国に移動、小学校二年から高校まで

韓国の学校で学んだ。恭秀の場合は福順と一緒に永住権の更新をしていたので、元々日本の永住権がある。その後、佼成会の学林に海外修養生として入学し、卒業したあと、東京で佼成会とはかわりのない仕事についている。佼成会の会員である。

福順の人生は、自分自身が前向きに開拓していく性格に起因するところもあるだろうが、家族が二つの国に別れて住むという困難な状況の中で、日本で佼成会に入会し、日韓を往復し、日本に家族を呼び寄せることはできないことを認識した時期に佼成会からの依頼もあつて、韓国に戻り、幸子とともに韓国佼成会を名実ともに担う人物になった。

福順は、家族を日本に呼び戻したいという一念によるものとしても、なかなか家族と一緒に暮らすことができなかったことを常に申し訳ないと思っていたようである。

ところで、今回、この論文を書くに際して、いろいろと資料を探してもらった。その時に一九八九年一月一日、道場の入仏落慶の翌年、福順が書いた「李福順の子供たちにササゲル言葉」という便箋五枚にわたる手紙が見つかった。その文章を記して本稿を終えよう。

いつの日かわからないけれど、この手紙を読んでくださる日がきつとくるでしょう。……私の縁に触れる現象は仏の説法だと思いながら、これもあれも私を高めるがための仏様の慈悲と懺悔をして、又懺悔をして、心を仏様のようになるよう努力しながら、今日も一つできた、明日も一つできることでしょう。耐えること、忍ぶこと、善いことの繰り返しをしようと努力精進し、いろいろなことにぶつかり悲しい

思いをして、涙を流し、心を痛め、どうして人間として生まれてきたかと、また他人のせいになくなる人間の業の繰り返しを先祖代々、また子孫に続くことでしょう。

一九三六年八月二六日、人間として女としてこの世に出現、父母がいて姉妹弟がいて、その中での家族との出会い、いろいろなことがあって、又主人との出会い、また自分達の家族との出会い、人間ほど不思議な動物はいない。又、校成会との出会い、法華経との出会い、韓国人としての出会い、日本人との出会い、いろいろな出会いによって私という人間が一つの動物としてつくられたと思う。

やさしい人だなあとみれる人、こわい人だなあとみれる人、この人なら任せることができる人、ステキな人だなあと考える人、こんなわからずやもいるかしらと思う人、一言多いと感じる人、どうしようもない人、仏様ってどんな人なのかしら。どんなこと、どんな人でも仏様のようにみれる人。その仏様のようにみれるその見方、その心の持ち方が問題なのかもしれない。

（心痛める時はどんな時）①好きな人と別れる時、②だまされた時、③泥棒にあった時、④悪い人と言われた時、⑤ケガをした時、⑥病気になった時、⑦わかってもらえない時。いろいろな悩みとの出会い、この世は出会いによって、ものごとがなりたち、それを因縁というのですね。

明治生まれの父と母が出会い、昭和に私が生まれ、昭和に子供が生まれ、この子供達が昭和に生まれた人達との出会いで、人間として成長してくださることでしょう。先祖が感じた出会い、悲しい思い、うれしい思い、愛する思い、別れの思い、きつと先祖のそのままを受け継ぐことでしょう。それが仏様との出会いなのだ。

私は佼成会との出会いで、私の人生との出会いはすばらしい出会いであったと思うようになった。何故なら一つでも多く悲しみ、喜び、悩みを、人間として仏様のように感じることでできる出会いにふれたことです。これから先、もっといろいろな人との出会いがありますこと、仏様に念じます。

子供達よ、母は貴方達との出会いによって、人間としての生き甲斐を感じました。でもそれが貴方達にとつて幸せであったかどうかは母はわかりません。でも人間はそんな思いをしながら生きる人生の中にいるのではないですか。どんな生き方をしても生きるのには変わりありませんが、仏様のように生きたいと思うその心の持ち方が、一番人間らしいと私は思います。いつか仏様になって、きっと娑婆世界ではなく仏の世界にいられる私になりたいです。きつとなれることでしよう。

合掌

こんな母との出会いで、幸せにしてあげられなかった母をゆるしたもう……。でもきつとすばらしい出会いがあることを信じています。あの世で待っています。またあの世で、この母との出会いは……。

……私の愛する子供達にお金の財産は何もないけれどお金にかえられない財産を。母が法華經に出会えた財産。それをそのまま受けついでくれた。その財産をいつまでもいつまでも大切にしたいです。

李福順

韓国教会の二階の事務所

一九八九年一月一〇日 五三歳

- (1) 立正佼成会は一九三八年に霊友会から分派して東京都で設立された教団で、庭野日敬を開祖、長沼妙俊を脇祖とする。法華三部経を所与の經典とし、夫方妻方双系の先祖供養、心の切り替えによる人格完成を目的とする。日常的な信行は、導き(布教・手とり)(育成)、法座、法の習学である。日本の新宗教の中では第二位の規模の教団で、『平成25年度版 宗教年鑑』によると、二〇一二年一二月現在の日本国内の公称信者数は約三一〇万人である。海外にはアメリカに五教会、ブラジルに一教会、台湾に二教会、韓国に一教会、タイに一教会、バングラデシュに一教会、スリランカに一教会の一二教会ある。このほか国際伝道本部直轄の拠点が九カ所、南アジア伝道区直轄拠点が六カ所ある。この中で韓国教会は、近年急成長を上げているバングラデシュについて第二位の約三四〇〇〇人の会員がおり、一〇〇%現地韓国人から構成され、着実な歩みをとっている。
- (2) 韓国の場合、女性結婚しても姓は変わらない。
- (3) 幸子が福順の妹(叔母)から聞いた情報によると、福順の父は真面目で、紳士、学があったので、まわりの在日韓国人から頼りにされた。母は学はなかったが、頭がよく、暗算もよくでき、記憶力もよかった。服を見る目があり、おしゃれで、ハイカラ、またとても綺麗好きだったという。
- (4) 民団系の学校である。中学校名は履歴書で分かった。韓国系の学校なので、福順が「韓国語はオモニ(お母さん)とアボジ(お父さん)しか分からない」と言うのをどうとらえるかと思ひ、幸子経由で福順の妹に聞いたところ、学校での使用言語は日本語で、民族教育はなかったとのことである。
- (5) 当時、幼稚園の先生になるのに免許はいらなかったとのことである。福順は、子どもたちに大変人気があったという。
- (6) 日本人が在日韓国人を養女とするということについては、当時の状況では稀なことだったと思われる。このことについても確認したが、園長先生が福順をよほど気に入ったのではないかと推測される。なお、通名を使っていたことや、韓国人の居住地域ではない場所に住んでいたというので、その点も確認したが、在日韓国人ということは分かっていただろうとのことだった。
- (7) 奉雨の母は、一九八四年に六五歳で死去した。
- (8) 福順は知っていた言葉はアボジとオモニだけと言っており、韓国語はできなかった。奉雨は小中学校を韓国で過ごしたので、ある程度分かると思うが、元々口が重い人である。

韓国立正佼成会における在日コリアン二世の女性教会長の生活史

- (9) その後、韓国は「漢江^{ハングァン}の奇跡」と呼ばれるほどの高度経済成長を遂げた。一九七〇年代から重化学工業が本格化していく。
- (10) 幸子によると、福順はビザの切り替え、再入国のハンコをもらいに日本の入管に行っていたという。福順は次のように語る。「最初は三カ月のビザしかもらえない。三カ月目に一回来て、また日本に行って、そうやっているうちに、(韓国で起こした)事業が倒産してしまつて。六カ月のビザをもらつて、こんどは一年ですね。それに対して幸子は次のように返していた。「六カ月間のビザをもらつて入ったけど、六カ月もおらず、韓国がいやで日本に帰ったり、また倒産した事業の借金の残りもあつたし、将来のことを考えると韓国でブラブラしているのがもつたいなかったみたい、母の立場からすると。そうやってお父さんの衣料工場が倒産してから、仕事もないし、田舎で農業するのもいやで、日本と韓国とを行ったり来たりしていた」。
- (11) 井出論文(二〇〇九)では、「ポッターチャンサ」という下関― 부산間の航路を使って日韓を往復する荷物の運び屋の事例を扱っているが、福順の場合は飛行機を利用し、また彼らほど職業的で頻繁なものではない。
- (12) その当時、女子は都会の工場で働きたいと思っていた。幸子たちは田舎から来たお手伝いさんとは合わなかったという。当時は、日本式のおかず慣れていたもので、食べ物も韓国の田舎式で口に合わず、食器の洗い方、洗濯の仕方も田舎式だった。
- (13) 福順の父に家屋土地の購入可否について四柱推命でみてもらったところ、買つておいて損はしないという判断が出た。周囲の人々はソウルに家を買つたので驚いていた。
- (14) 奉雨は農業の経験はなかった。しかし、経験がなくても、人件費が安い時代だったので、ご飯さえ食べさせれば、あの時代はみんな手伝つてくれた。労働力が豊富で、村の人が三〇人集まつて田植えをするといった時代であった。なお、奉雨の母の家は地主で、使用人は男三人、女二人いた。
- (15) 英子は李家の経済を支える陰役であった。
- (16) 大阪教会は西日本の拠点という位置づけであった。一九六四年の会員数は二〇〇世帯、一九七〇年には一万世帯を達成した。一九七三年一月には、西日本の布教、研修の拠点と目された関西本部修養道場の地鎮祭が行われ、一九七四年一月着工、一九七六年五月上棟式、十二月に入仏式、一九七七年五月に落慶式を迎えた。地上一〇階地下二階、敷地二六五〇平方メートル(約八〇〇坪)、延べ面積一万七一二平方メートル(約五二〇〇坪)で、大阪普門館と名づけられた。この大阪普門館の完成を機に、関西地区重点布教開発第一次五カ年計画がスタートした。これは近畿圏の会員倍增を目指したもので、地区法座を軸とする拠点布教を展開する一方、その核となる組長の練成会を開き、布教活動の拡充と人材育成が図られた。特に一九七

八年七月には同計画の推進委員会が結成され、より一層の組織的布教が展開された。一九八一年には二万世帯を達成した。教団史編纂委員会一九八四、六六四―六七八頁を参照。

(17) 韓国校成会の展開過程の詳細については、渡辺二〇〇五を参照。

(18) 韓国の場合、紙に書いたものは巫俗を連想させるので、ネガティブにとらえられる。韓国の伝統仏教では主に坐像であるが仏像が本尊である。

(19) 父は一九九三年に九二歳で死去したが、福順は父が亡くなってからは弟の家になったので、帰る家がなくなり、次弟に韓国に永住する気持ちが定まった。幸子からみると福順の気持ちが本当に定まったのは二〇〇〇年に乳ガンになった時ではないかと推察している。

(20) 法人格を取得したいという最も大きな理由として幸子は、法人があれば招聘状なしに、日本と韓国を行き来できることを挙げている。これは一九八八年のソウルオリンピックの開催を境に海外旅行の自由化によって、問題がなくなった。本尊授与によって、信者が主任や組長の役につくことができるようになった。

(21) 韓国には「宗教法人」はない。

(22) この理由について、幸子は何か密告があったか、または当時、校成会の所在する龍山区にある金九先生という独立運動の志士の銅像前に、日本の宗教が会館を建てることが問題視されていたので、校成会がこれまで法人を無理にとろうとしているのはなぜかということで、警察から捜査がきたのではないかと推測している。

(23) プサン支部は、一九九二年に二派に分裂した。その分裂は收拾がつかず、一九九五年から二〇〇〇年にかけていったん布教を停止し、二〇〇一年から当時ソウル支部長だった福順が担当した。福順は月の三分の一プサンにいた時もある。福順は得意の料理で人の心をといていた。詳しくは、渡辺二〇〇五、六八―七一頁を参照。

(24) 幸子に教会長になってくれないかというのをずっと断っていたが、国際伝道本部の本部長に、福順が韓国校成会理事会からの教会長の辞令ではなく、正式に「会長先生から母に辞令をわたしてくれるならば」と交渉した。会長からの辞令がなくても不便なことはないが、戸籍に載せてもらえない感じで、福順の気持ちとしては「会長先生から辞令をいただきたい」と思っていたことを感じたからである。

(25) 奉雨は、校成会に対しては好意的であったが、母がクリスチャンの幹部だったので、田舎の母の存命中、田舎にいる時には

韓国国立正校成会における在日コリアン二世の女性教会長の生活史

キリスト教の教会の礼拝に出席していた。幸子によると「祖母と母の信仰が違ったので、父は両方に挟まれサンドイッチのようだった。田舎ではキリスト教の教会に行っていたし、ソウルに来ると佼成会に行っていた。父が佼成会の信仰に自ら積極的になったのは、李家が御守護尊神を勧誘させていただくために、一九八八年二月に父と母と史好が東京の本部に行ったことがきっかけ。父と史好は本部に行くのが初めてで、史好は佼成会が気に入り、そのまま学林に入るようになり、父が御守護尊神を受けた」。

(26) 福順は最後まで日本の永住権は手離さなかった。「韓国人にとっては、(植民地支配の)歴史があるので、日本人を信用できない。韓国人同士なので、それはない。日本から来たということで、はじめは抵抗があっても、日本人とは違う。そこで受け入れてくれたと思う」と福順は述べている。

(27) 福順は次のように語っている。「信者は『だんだん韓国人になりましたね』と言ってくれるが、今も日本人か韓国人かといったら答えられない。成田に帰ったらほっとする。仁川に来たら仕事で来たよう」。幸子によると、最後には、日本は窮屈だし、せっかちでみな忙しい、冷たいと言っていたとのことである。けれども幸子は福順のアイデンティティは韓国人ではなく、日本人だと述べている。実際そうであると筆者も感じる。

(28) もちろん、通訳として幸子がいる。福順はハンゲルは韓国で覚えた。また、福順からのこれは何というのかという問いに、幸子は答えた。最初は言葉のアクセントもおかしかった。佼成会の行事での原稿を日本語で書いたものを幸子が訳した場合や、韓国語で書いてきて、文章を見てくれという時もあった。福順は娘の幸子がそばにいて聞けたし、幸子も福順の言葉の間違いを注意した。

(29) 福順の父は、妻(福順の母)が病弱なので、それはどういうわけかを探るために四柱推命の勉強をした。父のところには人がみてもらいに来ていた。ある韓国の僧と知り合い、複製した本をもらい、それで勉強していた。この本を探したが見つからなかった。福順は父が四柱推命をみる時に手伝いをしていたこともある。四柱推命は体験しないとだめであり、また、父が勉強した縁のカンがあるという。父は福順の四柱推命をみて、「日韓を行ったり来たりでおまえは苦勞をしているが、四柱推命をみると五〇歳を越えたら、二つも三つも幸せが来る」と三〇代の時に言った。五〇歳は一九八六年にあたり、福順が支部長になった年であった。

(30) 一〇〇ウオンというのは、佼成会の毎月の会費を意味する。一九九二年からは一〇〇〇ウオンになった。会費は年単位でお

さめるが、韓国では会費制度はあまりなじまないようである。佼成会では布施のほうを強調している。

- (31) たえば、二〇〇七年八月三日に調査を行っていた時、福順のもとに離婚に関する相談がきた。「別れる前に一回教会長さんに会ってみてから決めたほうがよい」と言われてきた事例である。福順は四柱推命で鑑定し、次のようなやりとりがあった。「この旦那さんは次男ではないですか」、「なぜ分かるんですか」。そして、性格を言ったら合っている。現在の夫は、初婚後離婚し、一七年間一人でいた後、再婚した相手である。鑑定してみると因縁同士が合う。そこで、「幸せになりたいですか」、「なりたい」、「四柱推命をみると六白、離別運が入っている。早く総戒名を祀って修行したほうがよい。そうでないと子どもに離婚の因縁が伝わる」、「本貫（姓氏につく始祖の出生地を示すもの）を聞いてもってきます」といったものであった。

- (32) 日本的要素の変容（文化的異質性の希釈）の問題について、詳しくは渡辺二〇一〇を参照。

- (33) 総戒名とは、夫方・妻方両家の先祖すべてを象徴する礼拝対象で、日本では「諸生院法道慈善施先祖〇〇家徳起菩提心」と書かれており、右の〇〇家の箇所に夫方（父方）の姓を、左には妻方（母方）の姓を書く。韓国では、結婚後も夫婦の姓は変わらないので、〇〇家、〇〇家のところに、本貫（氏族発祥の地）と姓を書く。たとえば、総戒名には、右から金海金（夫方の父）、慶州李（夫方の母）、済州高（妻方の父）、密陽朴（妻方の母）などと四つが記入される。

- (34) 韓国の先祖供養と佼成会の先祖供養との違い、彼らの違和感の存在とそれに対する対応について、詳しくは渡辺二〇一〇、九三一―一〇七頁を参照。

- (35) 韓国では儒教による先祖の祭祀を大切にするが、仏壇に相当するものはなく、家に先祖や神を祀る習慣はない。韓国では儒教式の先祖の祭祀（チェサ）は長男の家で行われ、チバン（紙榜・韓国式の紙の位牌）を書いて供養し、法事が終わったあとにはそれを燃やして片づける。したがって、先祖の位牌を残して祀るという習慣がない。

- (36) 佼成会では、日本では入会すると総戒名を祀り込み、そして三代もしくは四代の先祖の戒名を集めるようにいう。先祖供養をすることは戒名を探したりするので先祖の霊を呼び起こすように思われるところもある。

- (37) 追善供養や総供養をするのは、まずは親孝行したいということ、そして出ている現証が先祖の訴えではないかと思う場合がある。福順は次のように述べる。「子どもによって見せられるということがある。たとえば、子どもが喘息だったら、先祖のなかで喘息で亡くなった人はいますかと聞いたら、先祖を三代探していくと必ず出てくる。ご供養をきちんとさせてもらおうねと言ったら、家で自分でやる人もおれば戒名室で追善供養させてもらいたいと言う場合もある。その人のご供養が足りなかつ

韓国立正佼成会における在日コリアン二世の女性教会長の生活史

たので追善供養や総供養をやるかと回復する。先祖と子孫は思い思われで、結果が出る。儒教の祭祀では供えものを派手にするが、戒名室ではなるべく負担にならないようにお膳の供えものも簡素にしてやる」。

(38) 伝統仏教の寺院には亡くなった人のチパンや写真を祀っている部屋があるので、その感覚の延長でとらえることもある。

(39) 幸子は教会が三時に終わった後、アパートに行き、父のご飯をつくり、弁当をつくって病院に行き、福順もそのおかずを食べた。英子にも持ち帰り用の一品を用意した。午後六時三〇分〜七時に英子と交代し、午前八時三〇分に英子が来る。幸子は病院で『韓国俊成』の翻訳をした。なお、韓国の病院では付き添い者をつけないといけないことになっている。

参考文献

井出弘毅「ボタリチャンサ——日韓境域を生きる越境行商人——」『白山人類学』一二号、五三―六六頁、二〇〇九年三月。

教団史編纂委員会編『立正佼成会 第五卷』佼成出版社、一九八四年五月。

渡辺雅子「韓国における立正佼成会の展開過程——日本宗教であることの困難と在日韓国人による現地韓国人布教」『明治学院大学 社会学・社会福祉学研究』一一九号、三五―一〇〇頁、二〇〇五年二月。

渡辺雅子「元在日韓国人の母娘、ペアで韓国布教展開 韓国立正佼成会の李福順さんと娘幸子さん」『中外日報』二〇〇八年二月一九日号、六頁。(女性のページ、信仰に生きる女性たち 第2回)。

渡辺雅子「韓国立正佼成会にみる日本の要素の持続と変容——現地化への取り組み」『明治学院大学 社会学・社会福祉学研究』一三三号、八三―一二八頁、二〇一〇年三月。

渡辺雅子「韓国立正佼成会の支部組織の転機と韓国人支部長の信仰受容の諸相——教会の増改築が与えた影響に着目して」『明治学院大学 社会学・社会福祉学研究』一四四号、八三―一三九頁、二〇一五年二月。

付記

李福順さんの健闘した人生をたたえるとともに、「ご冥福をお祈りする次第である。

本論文を書くにあたって、韓国に一家で帰国してから、福順さんが日韓を往復し、韓国に再度戻るまでの間のことについては、充分な聞き取りをしていなかったので、韓国立正佼成会教会長李幸子さん、および中央学術研究所スタッフの李史好さんからお

話を伺ったり、資料を提供していただいた。特に李幸子さんには大変お世話になった。記して感謝の意を表したい。

本論文には聞き取りで得た情報のほか、日記、私信、私的書類、写真など個人情報をも多々含むものが掲載されているが、公表可としていただいたことに感謝申し上げる。

韓国校成会の調査は二〇〇四年から継続的に行っているが、二〇一四年、二〇一五年の調査は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（Ｃ）「日本宗教の異文化布教に関する社会学的研究」によっている。

